

動詞時制と指示表現の 織りなすテキスト模様

—モーパッサン「盲人」分析—¹⁾

西 村 淳 子

目 次

1. 言語資料
2. 分析の手順
3. 動詞時制の分析
4. 指示表現の分析
5. 動詞時制と指示表現の相互作用とテキスト効果
6. おわりに
7. 資料

テキストを、語源に倣い「織物」textusに例えると、多種多様な素材がそこで出会い、それぞれのテキスト固有の模様を描きだす。素材の中でも、普通名詞や動詞、形容詞などのように現実を概念的に把握する語彙には光が当たり易いが、動詞時制や指示表現のような文法的要素の働きは読者の意識に上ることも少ない。しかし、これらの要素は、言語行為にとっては重要な役割を担っている。恒常的に安定した価値をもつ言語記号と個々の言語使用の場を関係づける働きを持っているからである。ところが、これらの記号には一種のパラドクスが潜んでいる。記号の恒常的な価値を

1) 本稿を、いつもあたたかく応援してくれていた亡父岩崎憲二に捧げます。

追究しようとする、話者のアイデンティティーが曖昧となり、時制や指示表現の価値も明瞭には捉えられなくなるのである。いつだれが言ったのかが定まらない「私」や「現在」とはなんなのだろうか。だれも、なにも指さない「彼」や「それ」は言語記号として価値をもっているのだろうか。

このような問題意識から、筆者は、フランス語の動詞時制や指示表現などの働きを知るためには、個々の具体的な言語使用の場で実際に成された言語行為を考察する必要があると考える。しかし、どのようにすれば言語行為の本質を捉えることができるのであろうか。おそらくこの問いは構造主義以降の言語学にとって最も重要な問題の一つであろう。本稿は、この問いに対して、一つの可能な答えを例示するものである。ここでは、実際に使用された言葉、つまり、「テキスト」を分析の対象にした。テキストは発話行為そのものではなく、いわば発話行為の痕跡であるが、話者と聴者、作家と読者が出会う接点、つまり、言語行為が成立するための要となるからである。

本稿で用いた方法は、基本的には、H. ヴァインリヒの提唱した「テキスト言語学」の考え方²⁾に基づくものであるが、ヴァインリヒの研究では分析の根拠となる基礎データが、おそらく膨大であるが故に網羅的に示されていない。しかし、筆者は、データを共有することが、分析の客観性を保証するための重要な要件であると考え、データの分析と提示方法を新たに開発した³⁾。これによって、解釈の根拠となる分析データが一目で見取れるようになった。この方法は、もともと動詞時制の分布を調べるために開発した方法であるが、本稿では指示表現にも対象を広げた。というのも、先行研究⁴⁾において考察したように、動詞時制と指示表現はともに話者と言語記号とを関係づけるという共通の役割を担っており、その関係付

2) H. ヴァインリヒ、『時制論』脇阪豊、大瀧敏夫、竹島俊之、原野昇訳、紀伊國屋書店 1982 年。

3) 西村淳子「テキストの時制分布と連関の形—テキスト言語学の方法—」、『武蔵大学人文学会雑誌』第 36 巻第 1 号、2004 年、pp. 37-73。

4) 西村淳子「指示表現と動詞時制の親和性—直示的時制、照応的時制、絶対時制—」、『武蔵大学人文学会雑誌』第 37 巻第 4 号、2006 年、pp. 21-36。

けのプロセス（時制の現実化作用、指示表現の指示作用）には、「直示」「照応」等々と呼びうる共通の特徴が認められるからである⁵⁾。

動詞時制と指示表現のこのような理論的な類似性を考慮した上で、本稿では、むしろこの二種類の表現がテキストの中でどのように関係し合い、どのような効果をもたらすかという問題を重点的に考察していきたい。それは、テキストという織物において二種類の糸がどのような模様を織りなすかという問いに似ている。言語体系の中では極めて限定された数の指示表現、動詞時制であっても、テキストにおいてその組み合わせが生み出す効果は無限である。そのような意味で本研究は分析のきわめて小さな一例に過ぎないが、記号中心の研究方法から脱却した言語使用の研究として、テキスト言語学の可能性を広げる試みでもある。

1. コーパス 言語資料

コーパスに選んだモーパッサンの短編小説「盲人」は、数ページの短い作品であるが、構成度が高く、鋭い表現力をもった作品である。もちろん本稿は言語の研究であり、目的は特定の文学作品固有の魅力を追究することではないが、言語研究のコーパスとして文学テキストを用いることには利点もある。第一の利点は、表現力のある作品は言語表現の豊かな可能性を含んでいるということである。言語研究の方法として、単純なものから複雑なものへと研究を進めるべきであるという考え方もある。しかし、単純な言表は往々にして文脈や状況への依存度が高い。相互理解の根拠が状況（例えば、話者と聴者の人間関係やその場の状況など）にある場合、考

5) 例えば、直示詞 ディクティヴ maintenant「今」、ici「ここ」、je「私」のような指示表現は、直説法現在や複合過去、単純未来と同様、発話の時点を基準に発話内容を位置づける。照応詞と呼ばれる アナフォリック la veille「前日」、là「そこ」、il「彼、それ」は直説法半過去や大過去などと同じく、文脈の要素を介して発話内容を位置づける。このほか、固有名詞は発話行為にも文脈にも依存せず指示を成立させるという点で、直説法単純過去や暦における年月日「2009年8月17日」と共通点もっている。

察対象とすることは難しい。これに対して、個別の状況を離れてもある程度機能しうる文学テキストは、状況に対して比較的自立性が高い。テキスト分析はそのような意味で、単純から複雑へ、局部から全体へという考察の方向性とは逆行するものであるが、記号に分解してしまうと見えなくなる人間の言語行動の流れが、マクロな視点に立つからこそ見える可能性もある。このように、言語表現の豊かさ、状況からの相対的な自立性、マクロな言語行為の流れを見渡せる点、など、文学作品は言語研究のコーパスとしても高い価値をもっていると考えられる。

2. 分析の手順

分析はまず動詞時制の分布と構成を調べ、次にこれとの関係で指示表現の分布構成を調べる。指示表現は、人称表現、時間表現、空間表現などである。

I. 動詞時制の分布と構成

①基礎データの作成：時制分布の可視化

- 動詞時制の同定
- 呈示

A. リスト：取り出した時制を出現順に列挙し、リスト化する。

B. 図式：使用時制の推移を把握し易いように図式化する。

②データの解釈：時制分布の解釈

- テキストの内容構成のグローバルな把握
- 時制の分布と内容構成の比較
- 個別テキストの時制分布の特徴と効果

II. 指示表現の分布と構成

①基礎データの作成：指示表現分布の可視化

- 指示表現の同定
- 呈示：取り出した指示表現を、上記「I. ①呈示 A」のリスト

に加えて列挙する。

②データの解釈

- 人称表現
- 時間表現
- 空間表現

Ⅲ. 動詞時制と指示表現の相互関係

3. 動詞時制の分析

3.1. 基礎データ：時制分布の可視化

それでは、具体的な分析に取りかかろう。分析は、最初に動詞の分布と構成を調べ、次に指示表現の分布、構成を考察する。そして、最後に両者を比較し、その組み合わせの意味を考える。

上の手順にしたがって言語資料のテキストに出現する動詞の時制を同定する。具体的には、テキスト中の動詞に下線を引いてマークし、冒頭から末尾まで通し番号を付ける。以下にテキストの一部を例示するが、全文は論末に掲載した⁶⁾。

L'AVEUGLE

Qu'est-ce donc que cette joie du premier soleil ?

Pourquoi cette lumière tombée sur la terre nous emplit¹-elle ainsi du bonheur de vivre ?

Le ciel est² tout bleu, la campagne toute verte, les maisons toutes blanches ; et nos yeux ravis boivent³ ces couleurs vives dont ils font⁴ de

6) 資料 i, pp. 507(234)~503(238)。本稿で考察の対象としたのでは、表1「時制コード」(p. 539(202))に挙げた12種類の時制である。現在分詞、過去分詞、不定法、または成句中の動詞(例えば Qu'est-ce que est)など活用しない形は、現実化機能を持たないので、分析の対象外とした。近接未来、近接過去も動詞時制は変化するので、完全に時制と対立関係にあるとはみなせない。したがって、これらは動詞 aller や venir のとる時制とみなした。接続法も4つの時制を区別せず、1つのグループとした。

l'allégresse pour nos âmes.

Et il nous vient⁵ des envies de danser, des envies de courir, des envies de chanter, une légèreté heureuse de la pensée, une sorte de tendresse élargie, on voudrait⁶ embrasser le soleil.⁷⁾

盲人

朝の光のもたらすこの喜びは一体なんなのだろう。なぜ地上に降り注ぐこの光は私達を生きる幸せで満たしてくれるのだろうか。空は青く、野原は緑、家々は真っ白だ。生き生きした色彩が私達の目に染み、魂を歓喜させる。踊りたくなったり、走りたくなったり、歌い出したくなったり、軽やかで幸せな思いがこみ上げ、優しさが広がり、太陽を抱きしめたくなりそうだ。

次に、マークした動詞を表の形にして、時制を同定していく。ここでは、分析の便宜上、各時制にコード番号を振った⁸⁾。これは相互に区別するためにランダムに振った数字であり、数字に意味はない。

表2. は「盲人」のテキスト全体の動詞時制をリストにしたものである。

表1. 時制コード

200	接続法
190	直説法前過去
180	直説法単純過去
170	直説法半過去
160	直説法大過去
150	条件法過去
140	条件法現在
130	直説法前未来
120	直説法単純未来
110	直説法現在
100	直説法複合過去
90	命令法

7) MAUPASSANT, G. "L'Aveugle", Texte publié dans *Le Gaulois* du 31 mars 1882.

<http://athena.unige.ch/athena/selva/maupassant/textes/aveugle.html>

以降の引用に関して、その都度出典を示さないが、本稿で分析したこのテキストはすべてこのホーム・ページの引用である。日本語訳は筆者。全文を本稿末に掲載。

8) 時制は入力上の便宜上、コード化した。時制コードのリストは表1。

表2. L'Aveugle 動詞時制リスト⁹⁾

段落	小 区分	文 番号	動詞 番号		時制 コード	時制	
1	1.1.	2	1	<u>emplit</u>	110	現在	
		3	2		<u>est</u>	110	現在
			3		<u>boivent</u>	110	現在
			4		<u>font</u>	110	現在
			5		<u>vient</u>	110	現在
		4	6		<u>on voudrait</u>	140	条件法現在
	1.2.		5	7		<u>restent</u>	110
		8			<u>apaisent</u>	110	現在
		9			<u>voudrait</u>	140	条件法現在
	6		10		<u>rentrent</u>	110	現在
			11		<u>dit</u>	110	現在
			12		<u>a fait</u>	100	複合過去
			13		<u>répond</u>	110	現在
			14		<u>Je m'en suis bien aperçu</u>	100	複合過去
			15		<u>qu'il faisait</u> beau	170	半過去
			16		<u>tenait</u>	170	半過去

3.2. データの解釈

テキストの内容構成

この物語は、弱者がなんの保護も与えられなかった時代、一人の盲人が虐待され死んでいく話である。物語は、明るい光、色彩、生きる喜びを表現した風景描写から始まる。しかし、主人公の盲人が登場するや否や、すべてが暗転する。子供時代はなんとか両親の庇護の下に生活できていたが、両親の死を境に周囲のすべての人たちから虐待を受けるようになる。いじめは徐々にエスカレートし、使用人ですら彼を殴るようになる。そして、ある寒い冬の日、義弟は盲人を雪の中に物乞いに出すが、迎えに行かず、周りの人々には探した振りをする。家族もしばらく探す振りをする。雪解

9) このリストは一部である。リストの全体は本稿末尾の資料 (pp. 498(243)~495(246)) に掲載。

けがやってきたある日、凍死した盲人の遺体は、カラスの群れを見てやってきた男によって、半ばついばまれた形で発見される。

物語の内容構成は一義的に決まるものではないが、通常はテーマやその取り扱い方にはある程度のまとまりがあり、これにしたがって、段落を分けることができる。この物語の構成は、おおよそ4つの大きな段落から成る。第一段落（文番号1~6）は、明るく色彩に満ち、生きる喜びに溢れた風景描写である。この明るさが、いじめの陰湿さとコントラストを成し、物語の暗さを際立たせることになる。第二段落（文番号7~35）では、いじめが徐々にエスカレートしていく様子が段階的に語られる。第三段落（文番号36~56）では、主人公の盲人が死に至る経緯が語られる。最初は、義弟のとった行動が描かれ、次にそのときの主人公の様子が、そして、しばらく後に主人公の遺体が雪の中に発見される様子が描かれる。最後の段落（文番号57）では、この話が、天気の良い日に連想する語り手の思い出として、物語の外にある語り手の世界に位置づけられる。

3.3. 「盲人」の動詞時制の分布

動詞時制はテキストの中でランダムに分布しているわけではない。ここで考慮した12種類の時制も同等の頻度で現れるわけではない。このテキストで使用されている時制の出現頻度をグラフにすると、図1ようになる。

全体として見ると、圧倒的に直説法半過去の頻度が高く、それに次いで直説法単純過去、直説法現在、直説法大過去が認められる（以下「直説法」は省略）。それ以外の時制の使用頻度は極端に少ない。

このテキストに使われた動詞時制を出現順に並べると図2ようになる¹⁰⁾。

10) 各時制にはコード番号を振り当てた（表1、p. 539(202)）が、時制間には、量的に計れる均質的尺度があるわけではないので、これは視覚的に分布の推移を全体的に把握するための図であって、上下の変化が何らかの量的な変化を表すグラフではない。図2は p. 494(247)を参照。

図 1. L'Aveugle 時制頻度%

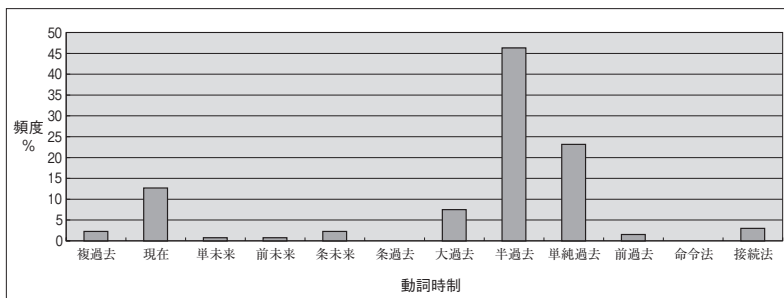
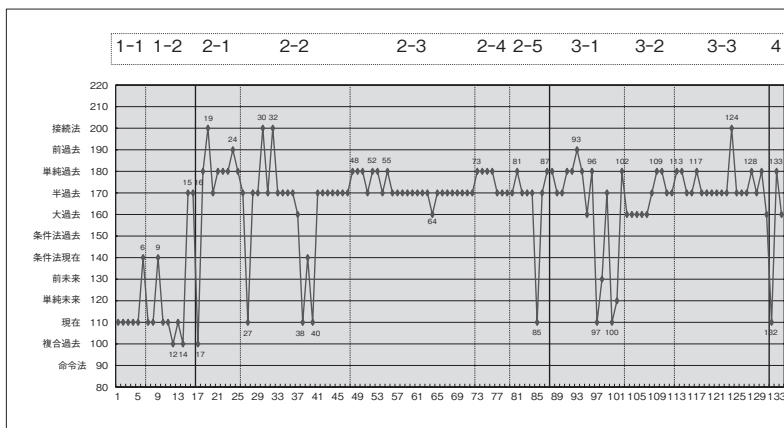


図 2. L'Aveugle 動詞時制分布図



3.4. 基本時制

図 2 から明らかなことは、動詞時制の推移には一定の連続性があるということである。このテキストの場合、冒頭の第一段落に直説法現在が連なり、次の段落からは半過去が基本となって、そこに単純過去が混じるといいう構成になっている。また、途中大過去が固まって出現する。筆者は、このように、テキストの一つの場面において、ベースとなる時制を基本時制と呼び、局所的に現れる変化と区別して考えている。基本時制となるかどうかを決める客観的基準があるわけではないが、同質的に推移する一連の

時制がテキストの本質的な性格を決めると考えられる。通常のテキストにおいては、基本時制の頻度が圧倒的に高く、容易に見分けられる。というのも、一般的に話者は話の内容や話す態度などを急激に変化させず、異質的な変化よりも同質的な推移を好む傾向があるからである。

3.5. 語り時制のテキストに局所的に現れる説明時制

ヴァインリヒは動詞時制を「説明の時制」と「語りの時制」に分類した。「説明の時制」とは、話者とのつながりをもった世界のできごとを伝える時制であり、「語りの時制」とは、話者の世界とは切り離された世界のできごとを表す。この「語り時制」／「説明時制」という対立を念頭に入れてこの物語の時制分布を見ると、テキストの大部分が語り時制で書かれていることが分かる。

一般的に語りのテキストに局所的变化をもたらす要因を挙げると次のようなものが挙げられる¹¹⁾。

- ・ 語り手の介入、聞き手への働きかけなど、物語の外の世界が関与する場合（話者のコメントなど）
- ・ 具体的な時空に位置づけられない一般的命題や性質の示されるとき
- ・ 登場人物の観点へ移行するとき（「直接話法」など）
- ・ テキストの構成を示すメタ・テキスト的要素（強調構文など）
- ・ 物語の一部を劇的に呈示する「物語的現在」

このような局所的な現象は細かく時制の推移を変化させるが、これらを保留して全体を見ると、大きな基本時制からなる物語の全体構成が見えてくる。

11) 詳しくは、西村淳子「動詞時制から見た物語の多元的構成—「語り」時制／「説明」時制の局所的交替が生み出すテキスト効果—」『武蔵大学人文学会雑誌』（1999年・②）を参照。

3.6. 時制分布の特徴

それでは、このテキストの時制構成の特徴を考察してみよう。

特徴 1. 基本構成は「説明—語り—説明」

表 2、および、図 2 が示しているように、物語の大部分は語りの時制（単純過去、前過去、半過去など）である。しかし、物語の冒頭（動詞番号 1～17）と末尾に説明時制が認められ、語りが説明に挟まれた形になっている。このような構造の物語は珍しくなく、冒頭の説明部分は、我々の日常的な世界から物語の世界への導入の役割を果たしたり、物語の世界そのものを重層的な構造にするなど様々な効果を生み出している¹²⁾。この物語においては、導入部分と末尾の説明部分は、語り手の住む光と色に満ちた世界を描く。そして、その明るさが盲人のたどる苛酷な運命の陰湿さとくっきり対照を成し、物語の暗さ、悲劇性を一層強調することになっている。このように、描かれる二つの世界の境界が二種類の時制の対立とぴったりと重なり、「説明時制で描かれた語り手の明るい世界」／「語り時制で書かれた盲人の閉ざされた世界」という対立を物語りに与えている。

通常「説明」時制と「語り」時制が同一文の中に現れることは少ないが、第一段落から第二段落への移行部分、すなわち説明の部分から語りへ移行する接点に当たる場所では、変則的に同一文中に両方の時制が使われている。

J'ai ^{複合過去}connu un de ces hommes dont la vie ^{単純過去} fut un des plus cruels martyres
qu'on puisse rêver. (動詞番号 17-19)

私は、人生が想像できる限りもっとも苛酷な苦難であったというような人物に会ったことがある。

このような文の存在は、説明時制（複合過去）と語り時制（単純過去）

12) 西村淳子「動詞時制から見たテキスト構成の手法—「説明」時制、「語り」時制の分布と物語の全体構成—」、『武蔵大学人文学会雑誌』第 30 巻第 2・3 号、1999 年 - ①。

の区別が現代ではなくなっていることを示すと主張する研究者もいるが、テキストの全体におけるこの文の位置を考慮すると、これは、説明部分から語り部分への移行部分において生じた現象であり、逆に説明と語りの区別が生きているからこそ起こった混在であると筆者は考える¹³⁾。

特徴2. 段階的クレッシェンド

第二段落では主人公の盲人が登場し、いじめが徐々にエスカレートしていく。いじめの内容が、食事中のからかいに始まり、暴力へ、そして、物乞いの強要にまで発展し、ついには盲人を死に至らしめることになる（第三段落）。いじめは段階的に、螺旋的に進展していく。記述は、通常の物語のように個々の出来事を継起的に追うのではなく、単純過去によって一旦纏められたことを半過去で詳述するという形が繰り返される。ここで注目すべきことは、単純過去と半過去は、「前景」対「背景」という浮き彫り構造をなしていないということである。この物語では、語りにおける単純過去と半過去の同じ組み合わせが、要約と詳述の繰り返しという下の表3のような階段構造を構成し、時間の進行に階段のような不連続性を導入している。単純過去に置かれているのは、partirやcommencerなどの瞬間的に経過する出来事を表す動詞のみならず、vivreやavoir, souffrirなど継続的な行為、状態を表す動詞も同様である。このような継続的なアスペクトを持つ動詞を単純過去のような瞬間的なアスペクトを持つ時制におくと、一種の圧縮効果が生まれる。つまり、長時間の出来事が瞬時に把握

13) 例えば、A.VASSANTは現代においては、もはや単純過去と複合過去の使用上の区別はなくなっていると主張をしている（“Ambiguïtés et mésaventures d’une théorie linguistique: les relations de temps dans le verbe français d’E.Benveniste”）。VASSANTはその根拠として、『星の王子さま』の一場面において、単純過去と複合過去が混在していることを挙げている。しかし、筆者がこの作品の全体の時制分布を調べたところ、この部分は、まさに物語が語り手の世界からフィクションの世界へと離陸しようとしている場面であり、ここを境に時制も全面的に説明時制から語り時制へと移行する。したがって、このような混在も語りと説明の時制の使い分けがあるからこそ生じる現象であると考えられる。詳しくは、西村淳子、*Op. cit.* 1999年-②、p.34、注4。

されるのである（圧縮の単純過去¹⁴⁾）。

したがって、圧縮と詳述の繰り返しによって、執拗に繰り返されるいじめが段階的に、そして螺旋的にエスカレートしていくさまが、物語の冷酷さを一層強調することになる。

表 3. 第二段落 螺旋的反復構造

段階	内 容	時 制
第 1 段階	父母の死	単純過去 (21~25)
		半過去 (26~47)
第 2 段階	見せ物にする	単純過去 (48~55)
		半過去 (56~72)
第 3 段階	暴力	単純過去 (73~76)
		半過去 (77~80)
第 4 段階	物乞いをさせる	単純過去 (81)
		半過去 (82~86)
		単純過去 (87)

特徴 3. クライマックス：大過去による視点と事態の分離

主人公の死は物語のクライマックスに相応しい劇的なテーマである。この物語においても、主人公の死を描く第三部がクライマックスであると考えられる。第二段落の段階的クレッシェンドによって高められた緊張感は、主人公の死によって頂点に達する。しかし、この物語のクライマックスは奇妙な形をしている。通常の話のように、死に至る主人公の様子を克明に追うということはない。主人公の死がまず一言で要約され (Et voici comment il mourut⁸⁸. 「そしてこんな風に盲人は死んだ」)、そのあと描かれるのは義弟の行動である。主人公でもない義弟の行動が描写され、その

14) 西村淳子、*Op. cit.* 2004年、p.60。

上、義弟の言葉までが直接話法によって伝えられる。あたかも盲人自身に焦点を当てるのを避けるような間接的な死の描写である。

Un hiver, la terre ^{半過去} était couverte de neige, et il ^{半過去} gelait horriblement. Or son beau-frère, un matin, le ^{単純過去} conduisit fort loin sur une grande route pour lui faire demander l'aumône. Il l'y ^{単純過去} laissa tout le jour, et quand la nuit fut venue, il ^{単純過去} affirma devant ses gens qu'il ne l'^{大過去} avait plus retrouvé. Puis il ^{単純過去} ajouta : "Bast! ^{現在} faut pas s'en occuper, ^{前未来} quelqu'un l'^{大過去} aura emmené parce qu'il ^{大過去} avait froid. ^{現在} Pardi! i n'est pas perdu. I ^{単純未来} reviendra ben d'^{現在} main manger la soupe". Le lendemain, il ne ^{単純過去} revint pas (動詞番号 89~102).

ある冬、地面は雪で覆われ、おそろしく凍てついていた。すると義弟は、ある朝、物乞いをさせるために盲人をずっと遠くの街道まで連れて行った。一日中そこに放置し、夜がきても使用人達の前では、盲人は見つからなかったと言った。おまけに「なあに、構うことはねえさ。寒がっていたから誰かが連れて行ったんだろうよ。そうさな、迷ったなんてことはねえさ。明日んなったら飯食いに帰ってくるさ」。

次の日になっても盲人は帰らなかった。

因みに、ヴァインリヒが19世紀以降の小説の基本的な構造として注目した、半過去（背景）と単純過去（前景）による浮き彫り構造は、ここではほとんど認められない¹⁵⁾。状況描写に半過去が用いられているのは、わずかに2回だけである。(Un hiver, la terre ^{半過去} était couverte de neige, et il ^{半過去} gelait horriblement. 「ある冬、地面は雪で覆われ、恐ろしく凍てついていた。」)

主人公の死という極限の場面に至っても、物語が追うのは主人公を死に至らしめる義弟の行動であり、盲人は義弟の行為の対象でしかない。そして、義弟の行動が完了したのち、ようやくその間の盲人の様子が大過去によって振り返られる。

15) H. ヴァインリヒ、前掲書、pp. 198-202.

Après de longues heures d'attente, saisi par le froid, se sentant mourir, l'aveugle ^{大 過 去}s'était mis à marcher. Ne pouvant reconnaître la route ensevelie sous cette écume de glace, il ^{大 過 去}avait erré au hasard, tombant dans les fossés, se relevant, toujours muet, cherchant une maison.

Mais l'engourdissement des neiges l'^{大 過 去}avait ^{過 去}peu à peu envahi, et ses jambes faibles ne le pouvant plus porter, il ^{大 過 去}s'était assis au milieu d'une plaine. Il ne se releva point. (動詞番号 103~107)

長い時間待ったあげく、寒さに捕まって死にそうだと感じ、盲人は歩きだしていた。この氷の泡に埋まって路は見分けがつかず、溝に落ちたり、起き上がったたり、ずっと黙って家をさがしながら、当てずっぽうに彷徨っていた。

しかし、雪のしびれが少しずつ盲人を侵し始めていた。弱い足はそれに耐えられず、野原の真ん中に座り込んでしまっていた。もう起き上がらなかった。

物語の視点は決して描かれる主人公に寄り添わない。物語の視点は、義弟の行為の描写とともに進み、すでにそれが終わった時点にまで進んでしまっている。盲人が死に至る過程は、すべてが終わってしまった時点から大過去によって回顧的に振り返られるのみである。大過去におかれた4つの動詞が基準とするのは、義弟の行為が完了した時点 (Le lendemain, il ne revint pas. 「次の日、盲人は帰って来なかった」) であり、語りの視点が再び盲人に寄り添うのは、盲人の死が完了した時点なのである (Il ne se releva point. 「盲人は起きあがらなかった」)。時制が大過去から単純過去、半過去に戻るのは、盲人の体が雪に埋もれて起きあがらなくなったときである。それ以降は、家族の様子や遺体が長く放置された後発見される過程が単純過去と半過去で描かれる。つまり、語り手の視点は徹頭徹尾盲人からは離れたところにあり、決して近づくことも、入り込むことも、寄り添うこともないのである。このように、この物語の中で大過去は、一連の出来事を、話の筋とは別に、読者の視点から離れた伏線として描くこと

に用いられている。主人公の死という本来もっとも重要なクライマックスとして扱われるべきテーマが、まずは他の人物の行為として描かれ、それが終わって初めて、終わってしまった視点から伏線として語られることが、盲人の孤独感、疎外感を最大限に高めている。

4. 指示表現の分析

ここまでではモーパッサンの短編小説「盲人」を動詞時制という角度から分析してきたが、ここからは、このテキストにおいて、登場人物や時間、空間を表す指示表現がどのように使われているかを考察していく。指示表現によって、どのような人やものがテキスト世界に取り入れられているか、また、どのように時間や空間が構成されているか、そして、それはテキストにどのような効果を与えているかを分析する。最後に、前半で明らかになった動詞時制の構成との関係を検討し、本テキストにおいて動詞時制と指示表現がどのような模様を織りなすのかを浮かび上がらせたい。

4.1. 指示表現と動詞時制の類似性と種類

ここでいう指示表現とは、人やもの、時間、空間などを指し示すことによって、談話の世界に外界の要素を取り込む役割をする表現である¹⁶⁾。外界とは日常言語においては話者の住む世界（今、ここ、私）であるが、話者の住む現実から切り離された世界（お伽話の世界など）が想定されることもある。談話に取り込まれた要素は文の中で相互に関係づけられ、述定という形で動詞時制を通じて外界の時空に位置づけられる。この意味で指示表現の指示作用（référence）と動詞時制の現実化作用（actualisation）

16) 本稿では、「指示」という語は、「述定」に対立する概念として用いている。狭義では「照応」と対立的に用いられることもあるが、ここでは照応表現も含め、外界の対象を指し示すことにより、言語表現に取り入れる働きのことをいう。P. CHARAUDEAU et D. MAINGUENEAU, *Dictionnaire d'analyse du discours*, p. 488.

は反対方向に外界と談話の内容を関係づける仕組みだといえることができる。筆者の分析によると、指示表現の指示作用と動詞時制の現実化の過程には一定の類似性が認められ、少なくとも「直示」「照応」「絶対」「非実現」（または「不特定」）の4種類のタイプを区別することができる¹⁷⁾。

表4. 動詞時制と指示表現の類似性と分類

	直示	照応	絶対	非実現 不特定
名詞句 代名詞句	je, tu, nous, vous (人称代名詞) ce (指示代名詞) ce livre (指示形容詞 + 名詞)	il, elle (人称代名詞) mon chapeau et celui de mon père (指示代 名詞) le livre (定冠詞 + 名詞)	Napoléon (人名固有名 詞)	on personne (不定代名詞)
時間 空間 表現	hier, aujourd'hui, demain (時間) ici (空間)	la veille, ce jour-là, le lendemain (時間) là (空間)	1789年(年号) Paris (地名)	toujours il était une fois
動詞 時制	直説法現在 複合過去 単純未来 命令法	前未来 半過去 大過去 条件法現在 条件法過去	前過去 単純過去	普遍的現在 不定法 接続法
動詞のそ 他の形	近接未来 近接過去	分詞構文 ジェロンディフ		pouvoir vouloir devoir

分類の基準となる各グループの指示過程の特徴は以下の通りである。

- 1) 「直示」deixis とは、話者の発話行為を基準にして対象を指示する過程である。通常は je や tu のような指示表現に対して用いられる言葉であるが¹⁸⁾、動詞時制にも発話時点を基準にしてメッセージを現実の中に位置づける過程が認められる¹⁹⁾。すなわち、発話行為を基準にして、その時点に事態を位置づける時制が「直説法現在」であ

17) 西村淳子 *Op. cit.* 2006年, p. 31。複合時制は2つのタイプのプロセスを併せもつ場合がある。例えば、前未来は直示と照応、前過去は絶対と照応の両プロセスをもつ。

18) BENVENISTE, E. "Nature des pronoms", *Problèmes de linguistique générale*, pp.251-157.

19) BENVENISTE, E. "Les relations de temps dans le verbe français", *Idem.* pp.237-251.

り、発話の時点を基準にして過去や未来に位置づけるのが「直説法複合過去」や「直説法単純未来」である。このような「直示的」時制群を、バンヴェニストは「談話時制」*les temps du discours* と呼び、ヴァインリヒは「説明時制」²⁰⁾ *les temps du commentaire* と呼んでいる。

- 2) *il, elle* 等のように、文脈の中の要素を利用して指示を成立させる過程は「照応」*anaphore* といわれる。動詞時制では、直説法半過去や大過去、条件法現在、条件法過去なども、文脈や状況によって設定された基準点を介して初めて言表を談話の時空に位置づけることができる。このような意味で、これらの時制も「照応時制」と呼ぶことができる。
- 3) 直説法単純過去は、文脈にも発話行為の状況にも基準を求めない、いわば「現在のない過去」である。この点で、単純過去は人名、地名などの固有名詞や暦の年月日などと共通性を持つ。筆者はこれを「絶対時制」*temps absolu*、「絶対指示」*référence absolu* と呼んでいる。
- 4) 最後に、特定の人やものを指示しない代名詞 *on* や *personne* などと似ているのが、特定の時空に位置づけられない普遍的な時間性を表す直説法現在や不定法、接続法などである。可能、願望、義務などの様態を表す動詞 *pouvoir, vouloir, devoir* も事態が特定の事実ではないことを表示する。これらの指示作用を「不特定指示」、動詞時制の「非実現過程」と呼ぶ。

このような動詞時制と指示表現との共通性を念頭において、ここからはこの物語における指示表現の使われ方を考察してみよう。

20) H. ヴァインリヒ、『時制論』pp. 37-69, H. WEINRICH, *Le temps*, p.39-65.

4.2. 基礎データの可視化：指示表現

まず最初に、コーパスのテキストから指示表現を取り出し、動詞時制の分布を調べるために作成したリスト（表2）にこの指示表現を加えて列挙する（表5、「L'Aveugleの動詞時制と指示表現」）。その際、もっとも関係の深い動詞と同じ行に並べると、テキストのどの部分に現れるかを一目で見てとることができる。リストは本稿末尾の資料に挙げた²¹⁾。以下の考察はこのリストの分析によるものである。

4.3. 共指示 co-référence：指示表現の多様性と指示対象の同一性

辞書や参考書に挙げられた例文と実際に使われたテキストとの違いは、記号が文を越えて相互に連関をもち、テキストの内容が一つの一貫した世界を構成するという点であろう。使用された言葉（テキスト）には、記号の潜在的な価値には含まれないテキスト世界が存在するのである。そして、テキストにおける指示表現も、一つ一つがばらばらに使用されているわけではない。多くの指示表現がテキスト世界における同一の指示対象を指示する。この現象を共指示（co-référence）と呼ぶ²²⁾が、共指示の連鎖（chaîne référentielle）²³⁾はテキストの一貫性、連関を作り出す重要な要因となっている。繰り返し指示される対象は当然テキストにおける重要度が高いと考えられる。そこで、ここからは、複数の指示表現によって指示さ

21) 資料v. 表5, pp. 493(248)-486(255)

22) R. ENDO（遠藤令子）*L'anaphore et la co-référence dans le discours narratif: la nouvelle et le fait divers*, Mémoire du DEA <Pouvoir, Discours, Société>, Université de Paris XII, 2005.

23) 「共指示」co-référenceとは、2つ以上の語が同じ指示対象を指示するという現象をいう。照応関係が存在する複数の語の関係（chaîne anaphorique）をいう場合や、照応関係を排除した同一対照の指示を言う場合（F. CORBLIN *Les formes de reprise dans le discours, Anaphores et chaînes de référence*, 1995, p.73）もあるが、本稿では「指示」référenceの概念を照応と対立的には考えていないため、「共指示」co-référenceの概念も広く捉え、照応関係の有無にかかわらず複数の語が同一の指示対象を指示する現象をこう呼ぶ。（P. CHARAUDEAU et D. MAINGUENEAU, *Op. cit.*, p.147 参照）

れる対象はなにか、また、そのためにどのような表現が用いられているか、そして、「直示」「照応」等々の指示プロセスの特徴を考慮すると指示表現の選択がこの物語をどのように性格づけているのかを考察していく。

このテキストにおいてもっとも頻度の高い表現は当然主人公の盲人である。しかし、主人公が登場するまでに何度も現れる人物がいる。これは、物語の登場人物とは同じ次元に属さないが、重要な役割を果たす「語り手」である。

4.4. 語り手

物語は往々にして誰かが語った話として提示される。もちろん語り手がない物語や語り手自身が同時に主人公になるような物語も存在する。この物語にも語り手は登場し、中核になる盲人の物語を紹介するが、物語の登場人物とはいえない。語り手がどんな人かは描かれておらず、物語りの登場人物に働きかけることもないからである。

表現形式という観点から見ると、語り手は、第一段落の前半においては、*nous, nos, je* など一人称の形、または不定代名詞 *on* をとり、物語の中心部（第二段落から第三段落まで）の三人称の登場人物とは区別されている²⁴⁾。このような構成、すなわち、三人称で語られる物語の冒頭と末尾に一人称の語り手が現れる構成「一人称の語り手／三人称の主人公／一人称の語り手」は、動詞時制の「説明時制／語り時制／説明時制」という構成と正確に合致する。一人称の指示詞も説明時制も直示的表現であるから、物語の冒頭と末尾は、指示表現と動詞時制の両方が、語り手を中心に構成されているといえる。

それでは、このように語り手中心に構成された冒頭部の役割はどのようなものだろうか。もちろん作品によってその働きはさまざまであるが、一般的には未知の物語の世界へと読者を誘うための導入の役割をすることが

24) *nous, nos, je* などの一人称代名詞によって連続的に語り手は指示されているが、一人称代名詞はそれぞれが直示的に語り手を指示するため、相互の連関は必ずしも存在しない。

多い。そして、末尾における「私」の感想は、語られる事態から読者の意識を逆方向に現実へと引き戻す働きがある。この物語においても導入の役割を果たしていることには違いないであろうが、もう少し考えると、別の解釈も可能になってくる。というのも、このように既知の世界（語り手の世界）から未知の物語の世界への誘いというのは単なる見せかけにすぎないのかもしれない。実際には、読者は語り手についてはなにも知らないのだから、語り手の存在はただ物語を初め、終わるための方便とも考えられるのである。額縁のように物語の世界の境界を標示するのである²⁵⁾。途切れのない世界をいつ、どこから切り取って話すか、語り手は常に読者にその理由を正当化しようとするのかもしれない。そうだとすると、物語の最初と最後が他の部分と異なるのは物語にとってはごく自然のことに違いない。いずれにせよ、ことさら明さの強調された語り手の住む世界が、物語の悲惨さ、暗さを額縁のようにくっきりと浮かび上がらせる効果をあげていることは間違いないであろう²⁶⁾。

4.5. 主人公

標題にもなっており、物語のほぼ全体にわたって繰り返し現れるのが、「盲人」l'aveugleである。盲人以外にも登場人物は数人いるが、登場頻度も低く、une soeur「妹」、son beau-frère「義弟」のように、ほとんどが盲人との親族関係を表す名詞で表現されている。当然のことであるが、この人物が主人公であることがこのことから確認される。

特徴 1. 漸次的焦点化による導入

盲人は物語の世界にはじめから登場しているわけではなく、語り手によ

25) このような境界表示機能 fonction démarcative は音韻論など言語のさまざまな層において重要な役割を担っている。

26) 西村淳子 *Op. cit.* 1999年 - ①において分析したモーパッサンの「初雪」やヴァレリーラルボーの「ドリー」なども、作品の冒頭と末尾の部分が、同じような明暗のコントラストを作り出している。

って紹介され、導入される。また、その導入の仕方は、一挙に特定の一人の「盲人」を指定するというやり方ではなく、主人公と同じカテゴリーの人々（「盲人たち」）がまず話題になる。そしてその後に一人が特定されるのである。映像に喩えると、まず遠くから主人公と同種の人々が映し出され、次第に主人公一人に焦点が絞られていく。このように主人公はグループから個人へと徐々に焦点を絞りつつ導入されるのである。

特徴2. 照応表現による共指示の連鎖

主人公は、一旦特定されるとテキスト全体に渡って何度も繰り返し言及される。この人物がどういう人間なのかを知るための記述的概念を含む普通名詞や形容詞は少なく、ほとんどの場合、照応機能のみをもつ *il*, *le* などの人称代名詞や所有形容詞 *son*, *sa*, *ses* などが用いられる。このような指示の連鎖は一人の主人公が特定されてから（第二段落の2, 文番号8）テキストの終わり直前（第三段落の2, 文番号49）まで続き、テキストに連関を生み出す主要な要因となっている。主人公の共指示の連鎖がこのテキストのいわば「背骨」となっているのである。

特徴3. 名詞句

照応表現の *il* が、同一人物（対象）を繰り返し取りあげ、物語の連続性を生み出すのに対して、名詞句は、対象の性質やあり方を概念化して記述、描写する。名詞句はある対象が初めて登場する場合、たとえば、指示の連鎖の冒頭に現れることが多い。ここでも、主人公が最初に登場するとき、*les aveugles* 「盲人」という名詞句が用いられ、初めて個別に特定されるときには、*le fils d'un fermier normand* 「ノルマンディーの百姓のせがれ」という名詞句が用いられている。主人公に関する記述は多くない。途中 *l'impotent* 「不具者」や *pauvre diable* 「気の毒な奴」、*le gueux* 「乞食」などの名詞も用いられているが、いずれも指示対象に対する話者の同情や共感の感じられない突き放した表現である。そして、最後には、*le*

cadavre「死体」という肉体的・物質的な存在となる。このような物質的な表現は、冷酷さすら感じさせる。しかし、感情移入のない冷淡な表現が、誰からも（語り手からさえも）徹底的に突き放された弱者の孤立感を際立たせている。

特徴4. 再名詞化

最初に導入されるときを除いて主人公はほとんど照応表現 *il* や *son* で言及されるが、第三段落の2（文番号44）において、もう一度「盲人」*l'aveugle* という名詞が用いられる。この名詞は最初から現れており、ここで再度使用されても主人公に関する情報が加わるわけではない。しかし、物語のテーマ構成から見ると、この部分には確かに先行文脈とは少し断絶がある。先行文脈で描かれているのは主人公を死に至らしめる義弟の行動であり、主人公はその対象でしかない。主人公が直接描写されるのは、義弟の一連の行動が終わってからである。すでに検討した動詞時制という観点からも、話題が義弟から主人公へと戻り、主人公の死が描かれる場面は大過去が連続的に用いられ（動詞番号103-106）、単純過去と半過去の文脈を切断している。共指示の連鎖の中で、一旦照応表現によって特定された人物が再び名詞で呼ばれることを再名詞化²⁷⁾ というが、この現象は、直前の文脈とは話題が交替するときに起こることが多い。そのような場合、名詞は記述的情報をもたらすのではなく、前文脈のテーマとは異なる対象を混同することなく指示を確立するために用いられたと考えられる。話題の交替を伴う場合には照応表現だけでは対象を特定できない可能性があるからである。

27) R. ENDO（遠藤令子）*Op. cit.* p.66.「再名詞化」という概念は、H. ヴァインリヒが提案した概念である。ヴァインリヒによると、照応表現によって共指示の連鎖が成立していても、他に多くの名詞が共起するとき、照応表現（代名詞など）の指示が成立しない危険が生じる。その危険が一定程度を越えると、再名詞化が起こる。（H.WEINRICH, *Grammaire textuelle du français*, 1989, p. 73.）

特徴5. 名前をもたない主人公

もう一つ重要なことは、この主人公には名前がないということである。小さな昔話でも、主人公に名前がないことは少ない。しかし、このテキストの主人公は、一般名詞が表す「盲人」という概念に包摂される大勢の一人としてしか捉えられない。固有名詞のように、唯一のものとしてこの世界に組み込まれていないのである。あたかも主人公は語り手からも個としての人格を拒まれているかのようである。

筆者は先の研究において、固有名詞が暦の年号、地名などと同様、話者の発話行為からも、文脈からも独立して指示を成立させる表現であることを指摘した²⁸⁾。そして、この過程は、単純過去が表す時間とも似ている。どちらも、話者の現在とは関わりなく、一回限りの時、一つだけのもの、場所を表す。同じ名前をもった人は現実にはたくさんいるのであるが、実際がどうであれ、固有名詞の使用には、指示された対象が唯一の対象であることが前提されている。時制という観点からも主人公の死が大過去で回顧的にしか捉えられなかったのと似て、指示表現という点でも、語り手は主人公を掛け替えのない存在とは捉えていないのである。このように、語り手は、指示表現においても、動詞時制においても、主人公に対して突き放したとらえ方を貫いているのである。

4.6. その他の登場人物

この物語には、盲人以外の人物も登場するが、その比重は重くない。登場人物の数も少なく、一人を指示する回数も限られている。その多くが主人公の親族であるが、彼らも主人公との親族関係を表す名詞句（「彼の妹」「義弟」など）によって指示される。当然名前を持つ登場人物はいない。

28) 西村淳子, *Op. cit.* 2006, pp.21-36.

- 不特定の「盲人」の弟、妹

主人公が特定される前の部分で、不特定の「盲人」の弟 un jeune frère や妹 une petite soeur, l'enfant (文番号 6) で照応しているが、それ以上指示の連鎖が続くことはない。

- 主人公の父母

「父母」(le père, la mère) が登場するのは主人公が登場した直後 (文番号 9) であるが、一度だけ「年寄りたち」les vieux (文番号 9) という 2 人を纏めた名詞句で再指示されたのちに再度登場することはない。

- 義弟

その他の登場人物で比較的重要な役割を果たすのは、「義弟」son beau-frère (文番号 11 ~) である。第二段落で盲人の遺産をだまし取った人物である。主人公が引き取られた家の主人であり、第二段落で螺旋的にエスカレートしていくいじめの中心人物である。クライマックス (第三段落) においてついに主人公を死に至らしめるのもこの人物である。その第三段落には、この人物を指示する表現が連続的に現れる (son beau-frère (文番号 38)、il が 4 回 (文番号 39, 40))。このように重要な役割を担う「義弟」であるが、指示の頻度からも、また、主人公に照応し、主人公との親族関係を表す名詞句 (「彼の義弟」) で指示されていることから考えても、物語の構成という角度からみると、主人公に従属する存在なのである。

このようにこの物語の登場人物を表す指示表現を検討すると、初めて現れる人物は普通名詞によってある程度特徴が記述され、2 回目からは照応表現によって共指示の連鎖を作っていることが分る。名詞句は主人公との親族関係を表す表現であり、主な登場人物はすべて主人公に関係づけられている。また、主人公だけが、やや抽象的な複数の指示表現 (les aveugles) から、特定の人物へと焦点を絞る段階的な焦点化による導入がなされている。物語を貫く背骨となる共指示の連鎖も「盲人」のものであることを考慮すると、この物語の人物構成は明らかに主人公の盲人を中心

とする求心的構成をなしている。ただ、その主人公も、語り手からは、かけがえのない存在としてではなく、名前ももたない「盲人」の一人としてしか捉えられていないのである。

4.7. 不特定の人 on

この作品には、不特定に人を指す on が 15 回現れる。人がなぜ不特定な形で表されているかに関しては、「だれでもよい」、「だれか分からない」「だれかが重要ではない」などさまざまな動機が考えられる²⁹⁾。このテキストにおいては、ほとんどの on が、テキスト構成上一定の効果を生み出している。つまり、中心となる主人公などの登場人物は特定されてくっきりとした輪郭をもち、その他の関与者は不特定で曖昧なままにされることによって、物語に中心と周辺、前景と背景が生まれるのである。現実を言語によって捉えたとき、すでに何らかの抽象化が始まっているが、一つのテキストにおいても、ものごとをどの程度厳密に特定するかは均質ではない。重要な人物やできごとほど鮮明に、特定の捉え、重要性の低い関与者は曖昧にしておくと、曖昧な背景の上に鮮明な前景が浮かび上がる。これもまた焦点化の一つの手法であり、on の使用の動機となっていると考えられる。動詞時制でも半過去と単純過去の組み合わせが浮き彫り構造を作り出すことができるように、指示表現では、on と特定の指示された人物の対立がもう一つの浮き彫り手法となる。そのような意味で on は背景の半過去などとも通ずるものがある。しかし、この作品における分布という点からみると 15 回の on のうち、半過去の動詞を伴うものは 8 回であり、このテキストの on と半過去にはとりわけ相関関係は認められない³⁰⁾。

29) 西村淳子「代名詞“on”の使用について」1987年。

30) on と半過去共起が多くないのは、このテキストに背景の半過去がきわめて少ないことと関係している可能性もある。半過去の他、on は単純過去 (5 回)、条件法 (1 回)、接続法 (1 回) と共起している。

4.8. 時間を表す指示表現

この物語には、物語を外界に位置づけるような時間表現（たとえば、年号や日付など）は含まれていない。時間表現はすべて物語の内部での時間関係を表すものばかりである。

反復、継続を含意する時間表現

時間に関与する表現を取り出してみると、時間表現にもいくつかの種類があることが分かる³¹⁾。とりわけ多いのは反復、継続を含意する時間表現である。

A chaque repas, on lui reprochait la nourriture (文番号 11/ 動詞番号 28)
食事の度に、食べ物のことで盲人を咎めた。

Jamais d'ailleurs il n'avait connu aucune tendresse, sa mère l'ayant toujours un peu rudoyé, ne l'aimant guère (文番号 13/ 動詞番号 37)
そもそも盲人は、優しくされたことがなかった。母親はいつも少し邪険に扱い、彼をあまり愛していなかった。

et la cuisine de la ferme se trouvait pleine chaque jour. (文番号 22/ 動詞番号 58)
この農家の台所は毎日人で一杯になった。

Tantôt on posait sur la table, devant son assiette...quelque chat ou quelque chien. (文番号 23/ 動詞番号 59)
あるときはテーブルの上の彼の皿の前に…猫や犬を置いた。

Tantôt on lui faisait mâcher des bouchons (文番号 27/ 動詞番号 71)
あるときは、盲人に栓を噛ませた

31) 表 5. pp. 493(248)~486(255)

et le beau-frère enrageant de le toujours nourrir, le frappa le gifla sans cesse, (文番号 28/ 動詞番号 74, 75)

義弟は、いつも盲人を食べさせていることを腹立たしく思い、絶えずたたいたり、平手打ちを加えたりした。

Et les valets de charrue, le goujat, les servantes, lui lançaient à tout moment leur main par la figure, (文番号 30/ 動詞番号 77)

農家の使用人たち、ろくでなしや召使いたちは、ことあるごとに顔面に手を掛け

On le portait sur les routes les jours de marché (文番号 33/ 動詞番号 82)

市の立つ日にはいつも道傍に連れて行った。

Il ne savait où se cacher et demeurait sans cesse les bras étendus pour éviter les approches. (文番号 36/ 動詞番号 88)

どこに身を隠していいかも分からず、人が近づくのを避けるため、絶えず手を伸ばしたままでいた。

Or, un dimanche, en allant à la messe, les fermiers remarquèrent un grand vol de corbeaux qui tournoyaient sans fin au-dessus de la plaine, puis s'abattaient comme une pluie noire en tas à la même place, repartaient et revenaient toujours. (文番号 52/ 動詞番号 118-121)

が、ある日曜日のこと、農夫たちは、ミサに行く途中、カラスの大群が野原の上をひっきりなしに旋回し、黒い雨のように同じ場所に襲いかかり、また舞い上がり、またやって来ているのに気づいた。

反復、継続を表す時間表現は、ほとんどが直説法半過去と共に用いられていることも注目に値する。いうまでもなく、半過去は反復、継続的なアスペクトを表す。したがって、これらの時間表現と半過去の共起は互いに同じ価値を高めていると考えられる。

期間を表す時間表現

また、時間表現には、期間を表す表現も少なくない。その間に起こったできごとをまとめて要約するような部分に現れる。

Pendant quelques années les choses allèrent ainsi. (文番号 18/ 動詞番号 48)

数年間はこんな風だった。

pendant des semaines entières, il ne rapportait pas un sou. (文番号 34/ 動詞番号 86)

何週間も一銭の稼ぎもなかった。

Ses parents firent mine de s'enquérir et de le chercher pendant huit jours. (文番号 50/ 動詞番号 113)

親戚の者たちは、1 週間の間は問い合わせたり、探したりするふりをした。

上に挙げた反復、継続時間の表現と期間表現の分布に注目すると、動詞時制の分布と相当程度重なりがあることが分かる。つまり、第二段落では、いじめの内容を要約する部分と詳述する部分の二段階構造が4回繰り返され、螺旋的にエスカレートするいじめが描かれる。期間を表す表現は、概ねこの要約部分に現れ、反復、継続を表す時間表現は詳述の部分に現れるのである。そして、この構造は先に分析した時制の対立「単純過去／半過去」の繰り返し構造とも平行している。

表6. 第二段落 螺旋的反復構造と時間表現

段階	小区分	内容	時制(動詞番号)	時間表現(関連動詞番号)
第1段階	1	父母の死	単純過去(21-25)	
	2		半過去(26-47)	A chaque repas(反復28) toujours(反復37)
第2段階	3	見せ物にする	単純過去(48-55)	Pendant quelques années (期間48)
	3		半過去(56-72)	chaque jours(反復58)、 tantôt(反復59,71)
第3段階	4	暴力	単純過去(73-76)	toujours(反復74,75) sans cesse(反復74,75)
	4		半過去(77-80)	à tout moment(反復77)
第4段階	5	物乞いをさせる	単純過去(81)	
	5		半過去(82-86)	pendant des semaines entières(期間86)

4.9. 空間表現

この作品に空間表現は乏しい。この物語の世界と外の世界との接点になり得るのは、le fils d'un fermier normand「ノルマンディーの百姓のせがれ」という表現の中の normand という地方名を表す形容詞だけである。しかし、この表現も時間的な限定がないために、物語を現実の時空に位置づける力はない。逆に、これは、いわば「借景」のようにノルマンディー地方の風土を出来事の背景に取りこむための装置なのではないだろうか。たった一言で冬のノルマンディー地方の寒々とした風土を物語の場面設定に利用しているのである。結局、この物語は現実の地方名を用いているが、特定の時空に定位されない、現実とは切り離された世界のできごとを記述しているのである³²⁾。

32) もちろん、架空の世界の物語や時空に定位されない物語が現実とまったく接点を持たないわけではない。むしろ、物語の扱う問題は、一回限りの事実としてではなく、普遍的な問

これ以外は、aux champ「畑で」、devant la porte「戸の前で」、contre la cheminée「暖炉にもたれて」などのように、物語の世界の中の相対的な位置関係、場所を示す表現である。

4.10. ものを表す指示表現

登場人物を表す表現が物語りの筋に関わる主旋律を奏でるとすると、ものを表す表現はいわば小道具の役割をする。ほとんどのものが一度限り登場し、名詞句で表されている。本テキストに用いられたものの表現に特別な特徴は認められないが、強いていうなら、冒頭（第一段落）の語り手の世界に関わる名詞に明るい表現が多いことは特徴的である（「朝日」 premier soleil, 「この光」 cette lumière, 「空」 le ciel, 「野原」 la campagne, 「この生き生きした色彩」 ces couleurs vives）。これは、すでに見たように、説明時制や一人称表現などの分布と呼応して、物語の中核とつよい明暗を生み出している。

4.11. 抽象名詞

これと同じコントラストは抽象名詞においてはなお顕著である。語り手の世界に現れる表現の明るさと同時に、物語の中核をなす部分の表現の暗さが印象的である。

冒頭の語り手の世界（第一段落）（明）

「喜び」 joie, 「生きる幸せ」 bonheur de vivre, 「歓喜」 de l'allégresse, 「踊りたくなる気持ち」 des envies de danser, 「走りたくなる気持ち」 des envies de courir, 「歌いたくなる気持ち」 des envies de chanter, 「軽やかで幸せな思い」 une légèreté heureuse de la pensée, 「ある種の優しさ」 une sorte de tendresse, 「この新たな楽しさ」 cette gaieté nouvelle

題として我々の住む現実に関与してくるのである。

物語の中核（第二、第三段落）（暗）

「彼らの永遠の暗黒」 leur éternelle obscurité, 「受難」 martyres, 「彼の酷い不自由さ」 son horrible infirmité, 「過酷な生活」 l'existence atroce, 「後悔」 regret, 「ある種の苦痛」 une sorte de souffrance, 「彼の無力さ」 son impuissance, 「彼の無感動」 son impassibilité, 「なぶり者」 un souffredouleur, 「ある種の受難者」 une sorte de bouffon-martyr, 「獯猛さ」 la férocité, 「盲目」 sa cécité, 「懇願」 supplice, 「憎しみ」 la haine, 「寒さ」 le froid, 「麻痺」 l'engourdissement, 「カラスの旋回」 un grand vol de corbeaux, 「執拗さ」 obstination

末尾の語り手の世界（第四段落）（明）

「生き生きした喜び」 la vive gaieté

これらの抽象名詞は、物語の小道具として、各段落を明暗に塗り分け、この物語の構成を補強するのに貢献しているのである。

5. 動詞時制と指示表現の相互作用とテキスト効果

以上、モーパッサンの「盲人」のテキストを動詞時制と指示表現という二つの角度から分析してきた。ここで、この二種類の表現が、共通にもっている諸特徴（直示、照応、絶対、非実現など）を考慮した上で、このテキストにおいて相互に関係し、どのような構成をもたらし、どのような効果を上げているかを纏めてみよう。

5.1. 語り手の世界と主人公世界の対立

動詞時制によっても、指示表現によっても重複的にマークされているのが、語り手の世界と主人公世界の対立である。語り手の光りに満ちた幸せな世界の記述が、主人公の辿った救いのない運命の暗さを強調している。語り手の世界は、動詞の時制では説明時制によって、人称表現では一人称

代名詞などの直示的表現によって表され、語り手「私」を中心に組み立てられている。また、人以外の名詞句も明るい陽気さを表す名詞が多い。これに対し、主人公の悲劇を描く中心部は、単純過去、半過去などの語り時制で表されている。指示表現は主人公を初め、登場人物にも三人称の名詞句や代名詞などの照応表現が用いられる。人以外のものを表す名詞も主人公の世界の暗さを強調するようなものばかりである。語り手の世界も主人公の世界も物語の外の世界に位置づけられてはいないが、「ノルマンディー」地方という表現がいわば借景として、物語の背景に取り入れられている。

5.2. 物語を貫く主人公の共指示連鎖と語りの時制

大部分を占める物語の中心部は、語り時制を基本時制として描かれているが、そこに強い連関を作り出すのが、主人公の共指示連鎖である。主人公は徐々に特定の度合いを強める漸次的焦点化により導入され、途中はほとんどがilなどの照応表現によって繰り返し指示される。このように基本時制の語り時制と、主人公の共指示の連鎖は、いわば物語を貫く背骨となって、物語の一貫性を支えている。

5.3. 螺旋構造

第二段落において、いじめの段階的な繰り返し、「要約」と「詳述」の4回の繰り返しからなる螺旋構造によって表されている。これは、単純過去と期間を表す時間表現が一つの段階を纏め、半過去が反復、継続的な時間表現と相まっていじめの内容を詳述している。これが4回繰り返しされ、執拗ないじめが螺旋的にエスカレートする様子が強調される。

5.4. 主人公と距離をとる語り手

すべての登場人物は主人公との関係を表す名詞句で表されるため、盲人がこの物語の主人公であることは疑いないが、主人公であっても語り手は

ある程度距離をとった扱いをする。たとえば、クライマックスにあたる主人公の死も最初は義弟の行為として描かれ、その後やっと主人公に注目する。時制は大過去が用いられ、義弟の行為を追ううちに過ぎてしまったできごとを再び回顧するという形をとるのである。つまり、語り手の視点は主人公の死に寄り添わず、終わってしまった後から振り返りだけなのである。また、指示表現に関しても、主人公に用いられる名詞句の冷淡さ（盲人、乞食、死体など）から語り手がこの主人公に対して距離を置いていることが感じられる。そして、おそらく決定的なのは、この主人公が名前を持たないという事実であろう。主人公はこの世に唯一無二の存在ではなく、同類（「盲人」）の一人にしかすぎないのである。このような語り手の突き放した態度が主人公の孤立感をひときわ高める効果を上げている。

5.5. 浮き彫り

単純過去と半過去は通常浮き彫り構造をなすといわれるが、この物語では、この2つの時制の組み合わせは、ほとんど浮き彫り効果を上げていない。ところが、指示表現の方は、不定代名詞 on などの曖昧さが、具体的に指示される登場人物を鮮明に浮き上がらせる効果をあげている。On は映画でいえば通行人のような存在で、人を特定せず抽象的な表現に留めることで、前景となる登場人物の方を際立たせる「浮き彫り」効果を上げていると考えられる。

6. おわりに

動詞時制や指示表現の共通の特徴を考慮に入れて、テキストにおけるこれらの要素の分布と働きを調べると、テキストが現実をありのままに投影するような均質的なものではなく、さまざまな構成をもっていることが見えてくる。この物語では、語りの基本時制や主人公を指示する共指示の連鎖が物語りの中核部の一貫性を支える。冒頭と末尾の語り手の世界は、額

縁のように、強烈なコントラストを作り出し、物語の暗さを一層強調する。物語の中程では、単純過去と半過去の繰り返しが段階的にエスカレートする螺旋構造をなし、緊張感を高めながらクライマックスへと導く。しかし、大過去によって回顧的に描かれるクライマックスにおいて、主人公は名前ではなく冷淡な指示表現で呼ばれ、語り手からも突き放された孤立感が一層強調される。また、これに加えて、焦点化、浮き彫り、借景などの手法も物語りの構成に一層の効果を与えている。

このように、動詞時制や指示表現は、辞書の中では抽象的で曖昧な価値しかもたない記号であるが、テキストの中で多くの要素と関係しあい、テキスト世界を織りなす中で、具体的な価値をもち、個々のテキストに固有の模様を描き出しているのである。

文献表

- BENVENISTE, E. *Problèmes de linguistique générale*, Gallimard, 1966.
- CHARAUDEAU, P. et D. MAINGUENEAU, *Dictionnaire d'analyse du discours*, Seuil, 2002.
- CORBLIN, F. : *Les formes de reprise dans le discours, Anaphores et chaînes de référence*, Presses Universitaires de Rennes, 1995.
- ENDO, R. (遠藤令子) *L'anaphore et la co-référence dans le discours narratif: la nouvelle et le fait divers*, Mémoire du DEA <Pouvoir, Discours, Société>, Université de Paris XII, 2005.
- ハリデイ, M. A. K., ルカイヤ・ハサン『テキストはどのように構成されるか?』 *Cohesion in English*, 安藤貞雄他訳、ひつじ書房、1997年。
- HINRICHS, E. ; «Temporal anaphora in discourse of English», *Linguistics and Philosophy* 9, pp.63-82, 1986.
- KLEIBER, G. : «Lorsque l'anaphore se lie aux temps grammaticaux», in VETTERS (éd.), *Le temps, de la phrase au texte*, 1993 pp. 117-166.
- LABEAU, E. et Pierre LARRIVEE, *Les temps du passé français et leur*

enseignement, 2002.

MANGUENEAU, D., *Approche de l'énonciation en linguistique française, embrayeurs, "temps", discours rapporté*, Paris Hachette, 1981

MULDER, W. de, L.TASMOWSKI-DI RYCK ET C. VETTERS (éds),
Anaphores temporelles et (in) cohérence, Amsterdam-Atlanta,
Rodopi, 1996.

西村淳子 「代名詞“on”の使用について」、『立命館文学』第501号、
1987年、pp. 1-21。

— 「動詞時制から見たテキスト構成の手法—「説明」時制、「語り」
時制の分布と物語の全体構成」『武蔵大学人文学会雑誌』第30巻第
2・3号、1999年 - ①、pp. 17-59。

— 「動詞時制からみた物語の多元的構成—「語り」時制／「説明」時
制の局所的交替が生み出すテキスト効果—」『武蔵大学人文学会雜
誌』第31巻第1号。1999年 - ②、pp. 33-67。

— 「テキストの時制分布と連関の形—テキスト言語学の方法—」、『武
蔵大学人文学会雑誌』第36巻第1号。2004年、pp. 37-73。

— 「指示表現と動詞時制の親和性—直示的時制、照応的時制、絶対時
制—」、『武蔵大学人文学会雑誌』第37巻第4号、2006年、pp.
21-36。

VASSANT, A. “Ambiguïté et mésaventure d'une théorie linguistique,
Les relations de temps dans le verbes français d'E. Benveniste”, in
L'Information Grammaticale 9, pp. 13-19, 1981.

ヴァインリヒ、H.: 『時制論』、脇阪豊、大瀧敏夫、竹島俊之、原野昇訳、
紀伊國屋書店、1982年。

WEINRICH, H. : *Le Temps*, Traduit par Michèle LACOSTE, Seuil, Paris,
1973.

— *Grammaire textuelle du français*, Didier, 1989.

動詞時制と指示表現の織りなすテキスト模様 西村淳子

参考ホーム・ページ

<http://athena.unige.ch/athena/selva/maupassant/textes/aveugle.html>

Guy de Maupassant : L'aveugle. Texte publié dans *Le Gaulois* du 31 mars 1882. Numérisation : Rémi Charest, Mise en forme HTML (5 novembre 1998) : Thierry Selva. (2010年1月31日確認)

7. 資料

資料 i . コーパス 言語資料 : L'Aveugle

資料 ii . 「盲人」日本語訳

資料 iii . 表 2. L'Aveugle の動詞時制リスト

資料 iv . 図 2. L'Aveugle の時制分布図

資料 v . 表 5. L'Aveugle の動詞時制と指示表現リスト

資料 i … コーパス 言語資料³³⁾

L'AVEUGLE

1. Qu'est-ce donc que cette joie du premier soleil ?
2. Pourquoi cette lumière tombée sur la terre nous emplit¹-elle ainsi du bonheur de vivre ?
3. Le ciel est² tout bleu, la campagne toute verte, les maisons toutes blanches ; et nos yeux ravis boivent³ ces couleurs vives dont ils font⁴ de l'allégresse pour nos âmes.
4. Et il nous vient⁵ des envies de danser, des envies de courir, des envies de chanter, une légèreté heureuse de la pensée, une sorte de tendresse élargie, on voudrait⁶ embrasser le soleil.
5. Les aveugles sous les portes, impassibles en leur éternelle obscurité, restent⁷ calmes comme toujours au milieu de cette gaieté nouvelle, et, sans comprendre, ils apaisent⁸ à toute minute leur chien qui voudrait⁹ gambader.
6. Quand ils rentrent¹⁰, le jour fini, au bras d'un jeune frère ou d'une petite sœur, si l'enfant dit¹¹ : "Il a fait¹² bien beau tantôt !", l'autre répond¹³ : "Je

33) このテキストは以下のホーム・ページより引用した。

<http://athena.unige.ch/athena/selva/maupassant/textes/aveugle.html>

Guy de Maupassant : L'aveugle. Texte publié dans *Le Gaulois* du 31 mars 1882.

動詞時制には下線を引き、出現順に番号を打った。活用しない動詞は考慮の対象外とした。分析のために文番号を左端に記し、すべての文で改行した。そのために原文の段落分けが分からなくならないよう、原文にて改行されているところは、一行行間を空けた。

m'en suis bien aperçu¹⁴, qu' il faisait¹⁵ beau, Loulou ne tenait¹⁶ pas en place.”

7. J'ai connu¹⁷ un de ces hommes dont la vie fut¹⁸ un des plus cruels martyres qu'on puisse¹⁹ rêver.
8. C'était²⁰ un paysan, le fils d'un fermier normand.
9. Tant que le père et la mère vécurent²¹, on eut²² à peu près soin de lui; il ne souffrit²³ guère que de son horrible infirmité ; mais dès que les vieux furent partis²⁴, l'existence atroce commença²⁵.
10. Recueilli par une sœur, tout le monde dans la ferme le traitait²⁶ comme un gueux qui mange²⁷ le pain des autres.
11. A chaque repas, on lui reprochait²⁸ la nourriture ; on l'appelait²⁹ fainéant, manant ; et bien que son beau-frère se fût emparé³⁰ de sa part d' héritage, on lui donnait³¹ à regret la soupe, juste assez pour qu'il ne mourût³² point.
12. Il avait³³ une figure toute pâle, et deux grands yeux blancs comme des pains à cacheter ; et il demeurait³⁴ impassible sous l'injure, tellement enfermé en lui-même qu'on ignorait³⁵ s'il la sentait³⁶.
13. Jamais d'ailleurs il n'avait connu³⁷ aucune tendresse, sa mère l'ayant toujours un peu rudoyé, ne l'aimant guère ; car aux champs les inutiles sont³⁸ des nuisibles, et les paysans feraient³⁹ volontiers comme les poules qui tuent⁴⁰ les infirmes d'entre elles.
14. Sitôt la soupe avalée, il allait⁴¹ s'asseoir devant la porte en été, contre la cheminée en hiver, et il ne remuait⁴² plus jusqu'au soir.
15. Il ne faisait⁴³ pas un geste, pas un mouvement ; seules ses paupières, qu'agitait⁴⁴ une sorte de souffrance nerveuse, retombaient⁴⁵ parfois sur la tache blanche de ses yeux.
16. Avait⁴⁶-il un esprit, une pensée, une conscience nette de sa vie ?
17. Personne ne se le demandait⁴⁷.
18. Pendant quelques années les choses allèrent⁴⁸ ainsi.
19. Mais son impuissance à rien faire autant que son impassibilité finirent⁴⁹ par

exaspérer ses parents, et il devint⁵⁰ un souffre-douleur, une sorte de bouffon-martyr, de proie donnée à la férocité native, à la gaieté sauvage des brutes qui l'entouraient⁵¹.

20. On imagina⁵² toutes les farces cruelles que sa cécité put⁵³ inspirer.
21. Et, pour se payer de ce qu'il mangeait⁵⁴, on fit⁵⁵ de ses repas des heures de plaisir pour les voisins et de supplice pour l'impotent.
22. Les paysans des maisons prochaines s'en venaient⁵⁶ à ce divertissement ; on se le disait⁵⁷ de porte en porte, et la cuisine de la ferme se trouvait⁵⁸ pleine chaque jour.
23. Tantôt on posait⁵⁹ sur la table, devant son assiette où il commençait⁶⁰ à puiser le bouillon, quelque chat ou quelque chien.
24. La bête avec son instinct flairait⁶¹ l'infirmité de l'homme et, tout doucement, s'approchait⁶², mangeait⁶³ sans bruit, lapant avec délicatesse ; et quand un clapotis de langue un peu bruyant avait éveillé⁶⁴ l'attention du pauvre diable, elle s'écartait⁶⁵ prudemment pour éviter le coup de cuiller qu'il envoyait⁶⁶ au hasard devant lui.
25. Alors c'étaient⁶⁷ des rires, des poussées, des trépignements des spectateurs tassés le long des murs.
26. Et lui, sans jamais dire un mot, se remettait⁶⁸ à manger de la main droite, tandis que, de la gauche avancée, il protégeait⁶⁹ et défendait⁷⁰ son assiette.
27. Tantôt on lui faisait⁷¹ mâcher des bouchons, du bois, des feuilles ou même des ordures, qu'il ne pouvait⁷² distinguer.
28. Puis on se lassa⁷³ même des plaisanteries ; et le beau-frère enrageant de le toujours nourrir, le frappa⁷⁴, le gifla⁷⁵ sans cesse, riant des efforts inutiles de l'autre pour parer les coups ou les rendre.
29. Ce fut⁷⁶ alors un jeu nouveau : le jeu des claques.
30. Et les valets de charrue, le goujat, les servantes, lui lançaient⁷⁷ à tout moment leur main par la figure, ce qui imprimaient⁷⁸ à ses paupières un

mouvement précipité.

31. Il ne savait⁷⁹ où se cacher et demeurait⁸⁰ sans cesse les bras étendus pour éviter les approches.
32. Enfin, on le contraignit⁸¹ à mendier.
33. On le portait⁸² sur les routes les jours de marché, et dès qu'il entendait⁸³ un bruit de pas ou le roulement d'une voiture, il tendait⁸⁴ son chapeau en balbutiant : "La charité, s'il vous plaît."
34. Mais le paysan n'est⁸⁵ pas prodigue, et, pendant des semaines entières, il ne rapportait⁸⁶ pas un sou.
35. Ce fut⁸⁷ alors contre lui une haine déchaînée, impitoyable.
36. Et voici comment il mourut⁸⁸.
37. Un hiver, la terre était⁸⁹ couverte de neige, et il gelait⁹⁰ horriblement.
38. Or son beau-frère, un matin, le conduisit⁹¹ fort loin sur une grande route pour lui faire demander l'aumône.
39. Il l'y laissa⁹² tout le jour, et quand la nuit fut venue⁹³, il affirma⁹⁴ devant ses gens qu'il ne l'avait plus retrouvé⁹⁵.
40. Puis il ajouta⁹⁶ : "Bast ! faut⁹⁷ pas s' en occuper, quelqu'un l'aura emmené⁹⁸ parce qu' il avait⁹⁹ froid.
41. Pardié ! i n'est¹⁰⁰ pas perdu.
42. I reviendra¹⁰¹ ben d' main manger la soupe."
43. Le lendemain, il ne revint¹⁰² pas.
44. Après de longues heures d'attente, saisi par le froid, se sentant mourir, l'aveugle s'était mis¹⁰³ à marcher.
45. Ne pouvant reconnaître la route ensevelie sous cette écume de glace, il avait erré¹⁰⁴ au hasard, tombant dans les fossés, se relevant, toujours muet, cherchant une maison.

46. Mais l'engourdissement des neiges l'avait peu à peu envahi¹⁰⁵, et ses jambes faibles ne le pouvant plus porter, il s'était assis¹⁰⁶ au milieu d'une plaine.
47. Il ne se releva¹⁰⁷ point.
48. Les blancs flocons qui tombaient¹⁰⁸ toujours l'ensevelirent¹⁰⁹.
49. Son corps raidi disparut¹¹⁰ sous l'incessante accumulation de leur foule infinie ; et rien n'indiquait¹¹¹ plus la place où le cadavre était¹¹² couché.
50. Ses parents firent¹¹³ mine de s'enquérir et de le chercher pendant huit jours. Ils pleurèrent¹¹⁴ même.
51. L'hiver était¹¹⁵ rude et le dégel n'arrivait¹¹⁶ pas vite.
52. Or, un dimanche, en allant à la messe, les fermiers remarquèrent¹¹⁷ un grand vol de corbeaux qui tournoyaient¹¹⁸ sans fin au-dessus de la plaine, puis s'abattaient¹¹⁹ comme une pluie noire en tas à la même place, repartaient¹²⁰ et revenaient¹²¹ toujours.
53. La semaine suivante, ils étaient¹²² encore là, les oiseaux sombres.
54. Le ciel en portait¹²³ un nuage comme s'ils se fussent réunis¹²⁴ de tous les coins de l'horizon ; et ils se laissaient¹²⁵ tomber avec de grands cris dans la neige éclatante, qu'ils tachaient¹²⁶ étrangement et fouillaient¹²⁷ avec obstination.
55. Un gars alla¹²⁸ voir ce qu'ils faisaient¹²⁹, et découvrit¹³⁰ le corps de l'aveugle, à moitié dévoré déjà, déchiqueté.
56. Ses yeux pâles avaient disparu¹³¹, piqués par les longs becs voraces.
57. Et je ne puis¹³² jamais ressentir la vive gaieté des jours de soleil, sans un souvenir triste et une pensée mélancolique vers le gueux, si déshérité dans la vie que son horrible mort fut¹³³ un soulagement pour tous ceux qui l'avaient connu¹³⁴.

31 mars 1882

資料 ii …日本語訳³⁴⁾

盲人

1. 朝の光のもたらすこの喜びは一体なんなのだろう。
2. なぜ地上に降り注ぐこの光は私達を生きる幸せで満たしてくれるのだろうか。
3. 空は青く、野原は緑、家々は真っ白だ。生き生きした色彩が私達の目に染み、魂を歓喜させる。
4. 踊りたくなったり、走りたくなったり、歌い出したくなったり、軽やかで幸せな思いがこみ上げ、優しさが広がり、太陽を抱きしめたくなりそう。
5. 盲人たちは門口で、永遠の闇の中にいつものようにじっとして、この新鮮な喜びの中であって理解もできずに静かにしている。はしゃぐ犬をいつもなだめているのである。
6. 一日が終わって、弟か妹の腕を借りて帰って来て、その子が「午後はお天気が良かったね」というと、「僕も天気がいいのがよく分かったよ。犬のルルがじっとしていなかったから。」と答えるのだった。
7. 私は、人生が想像できる限りもっとも苛酷な苦難であったというような人物に会ったことがある。
8. それは、百姓で、ノルマンディーの農家のせがれだった。
9. 父親と母親が生きているうちは、おおかたの面倒は見てもらえた。苦しむのは、自分がひどく不自由だからにすぎなかった。しかし、老夫婦が亡くなるやいなや恐ろしい生活が始まった。
10. 妹が引き取ったが、農家の皆は盲人を他人の飯を食う乞食のように扱った。
11. 食事の度に、食べ物の中で盲人を咎めた。怠け者とか、田舎者とか呼んだ。義弟は盲人がもらった遺産を横取りしたにもかかわらず、食事を出し惜しみ、かろうじて死なない程しか食べ物を与えなかった。
12. 盲人は青白い顔をし、封緘糊のような2つの大きな白い目をしていた。そして、ののしられてもじっとしていた。あまりにも自分の中に閉じこもっていたので、

34) 資料 i のコーパスに合わせて文番号を振り、本文において改行されている場所は、1行空けた。

感じているのかどうかも人には分からなかった。

13. そもそも盲人は、優しくされたことがなかった。母親はいつも少し邪険に扱い、彼をあまり愛していなかった。というのも、畑では役立たずは邪魔者だし、百姓なら不具の同類を殺してしまう雌鳥のようなこともしかねないから。
14. 夕食を掻き込むと、盲人は夏には戸口の前に、また、冬には暖炉のそばに座りに行った。
15. 夜になるまで身動きもせず、じっとしていた。ただまぶただけが、神経質に苦悩らしきものにかき乱され、白いシミのような盲人の目に時折落ちてくるのだった。
16. 盲人には心や頭があるのだろうか、自分が生きていることをはっきり意識しているのだろうか。
17. 誰一人そんなことを疑問に思うこともなかった。
18. 数年間はこんな風だった。
19. だが、盲人がなにもできず、じっとしていることに家族はいらだち、盲人は、なぶり者、いわば受難の道化師となり、周囲の生まれつき癡猛な乱暴者たち、陽気な野蛮人たちの餌食となった。
20. 彼の目が見えないことから思いつくありとあらゆる残酷な悪ふざけが考案された。
21. そして、盲人に食いぶちを支払わせるために、彼の食事を近隣の人たちの娯楽の時間にした。つまり、この不具者のいじめの時間にしたのである。
22. 近所の農民たちもこの気晴らしに集まってきた。隣近所に口々に伝えられ、この農家の台所は毎日人で一杯になった。
23. テーブルの上で盲人がスープをすすり始めた皿の前に、猫や犬を置くこともあった。
24. 猫や犬は本能的に盲人の不自由をかぎつけ、こっそりと近づき、そっとなめるように音を立てずに食べた。ちょっとやかましい舌でなめる音に気の毒な奴さんが気づくと、奴が当てずっぽうに投げるスプーンを避けるために用心深く遠ざかるのだった。
25. すると壁づたいにぎっしりと並んだ観客たちがどっと笑い、吹き出し、足を踏みならした。

26. 盲人は一言もしゃべらず右手で食事を再開し、左手を突き出して皿を覆って防衛するのであった。
27. コルク栓や木片や紙などわけのわからないゴミですら食べさせることもあった。
28. やがて、悪ふざけにも飽きた。すると義弟は盲人を食べさせていることにいらだって、しょっちゅう彼を殴ったり、叩いたりして、盲人がむなしく攻撃を躲そうとしたり、反撃しようとするのを笑った。
29. すると、新しい遊びが生まれた。ビンタゲームだ。
30. 農家の使用人たち、ろくでなしや召使いたちは、ことあるごとに顔面に手を掛け、そのため、盲人のまぶたはびくびくと痙攣するようになった。
31. どこに身を隠していいかも分からず、人が近づくのを避けるため、絶えず手を伸ばしたままでいた。
32. そして、ついには盲人に物乞いを強要することになった。
33. 市の立つ日にはいつも道傍に連れて行った。盲人は人の足音や車が近づくのが聞こえるやいなや帽子を突き出しつぶやいた「どうかお恵みを。」
34. しかし、百姓は気前がよくはない。何週間も一銭の稼ぎもなかった。
35. すると、情け容赦のない猛り狂うような憎悪が盲人に向けられた。
36. 結局、盲人はこんな風に死んだ。
37. ある冬、地面は雪で覆われ、おそろしく凍てついていた。
38. すると義弟は、ある朝、物乞いをさせるために盲人をずっと遠くの街道まで連れて行った。
39. 一日中そこに放置し、夜がきても使用人達の前では、盲人は見つからなかったと言った。
40. おまけに「なあに、構うことはねえさ。寒がっていたから誰かが連れて行ったんだろうよ。
41. そうさな、迷ったなんてことはねえさ。
42. 明日んなったら飯食いに帰ってくるさ」。
43. 次の日になっても盲人は帰らなかった。

44. 長い時間待ったあげく、寒さに捕まって死にそうだと感じ、盲人は歩きだしていた。
45. この氷の泡に埋まって路は見分けがつかず、溝に落ちたり、起き上がったたり、ずっと黙って家をさがしながら、当てずっぽうに彷徨っていた。
46. しかし、雪のしびれが少しずつ盲人を侵し始めていた。弱い足はそれに耐えられず、野原の真ん中に座り込んでしまっていた。
47. もう起き上がらなかった。
48. まだ降り続く白いものが彼を埋めた。
49. 体は硬くなり、無限に降り積もる雪の下に隠れた。そして、遺体の横たわる場所を示すものは何も残らなかった。
50. 親戚の者たちは、1週間の間は問い合わせたり、探したりするふりをした。涙すら見せた。
51. 冬は厳しく、雪解けはすぐにはやってこなかった。
52. が、ある日曜日のこと、農夫たちは、ミサに行く途中、カラスの大群が野原の上をひっきりなしに旋回し、黒い雨のように同じ場所に襲いかかり、また舞い上がり、またやって来ているのに気づいた。
53. 次の週にもこの不吉な鳥はまだいた。
54. 空には、まるでカラスがあらゆる地平から集まってきたかのように雲になっていた。そして、輝く雪の中に大きな鳴き声を上げて舞い降り、奇妙な染みとなり、執拗にあさっていた。
55. ある男がカラスはなにをしているのか見に行き、盲人の体を発見した。すでに半ばついばまれ、ずたずたにされていた。
56. 青白い目は長い貪欲なくちばしに突つかれてなくなっていた。
57. 私は、お天気の日生き生きした喜びを感じるとき、この乞食を悲しく思い出し、憂鬱な思いを抱かずにはいられない。あまりにも恵まれない人生だったので、盲人の恐ろしい死によって、彼を知っていた人たちがみながほっとしたほどである。

1882年3月31日

資料 iii.

表 2. L'Aveugle 動詞時制リスト

段落	小 区分	文 番号	動詞 番号		時制 コード	時制
1	1.1.	2	1	<u>emplit</u>	110	現在
		3	2	<u>est</u>	110	現在
			3	<u>boivent</u>	110	現在
			4	<u>font</u>	110	現在
			5	<u>vient</u>	110	現在
		4	6	<u>on voudrait</u>	140	条件法現在
	5		7	<u>restent</u>	110	現在
		8	<u>apaisent</u>	110	現在	
		9	<u>voudrait</u>	140	条件法現在	
	1.2.	6	10	<u>rentrent</u>	110	現在
			11	<u>dit</u>	110	現在
			12	<u>a fait</u>	100	複合過去
			13	<u>répond</u>	110	現在
		7	14	<u>Je m'en suis bien aperçu</u>	100	複合過去
			15	<u>qu'il faisait beau</u>	170	半過去
			16	<u>tenait</u>	170	半過去
2			2.1.	7	17	<u>J'ai connu</u>
	18	<u>la vie fut</u>			180	単純過去
	19	<u>qu'on puisse rêver</u>			200	接続法
	8	20		<u>était</u>	170	半過去
		21		<u>vécurent</u>	180	単純過去
	9	22		<u>on eut</u>	180	単純過去
		23	<u>il ne souffrit</u>	180	単純過去	
		24	<u>les vieux furent partis</u>	190	前過去	
		25	<u>l'existence atroce commença</u>	180	単純過去	
	2.2.	10	26	<u>tout le monde dans la ferme le traitait</u>	170	半過去
27			<u>comme un gueux qui mange</u>	110	現在	
11		28	<u>on lui reprochait</u>	170	半過去	
		29	<u>on l'appelait</u>	170	半過去	
		30	<u>bien que son beau-frère se fût emparé</u>	200	接続法	
		31	<u>on lui donnait</u>	170	半過去	
		32	<u>pour qu'il ne mourût</u>	200	接続法	

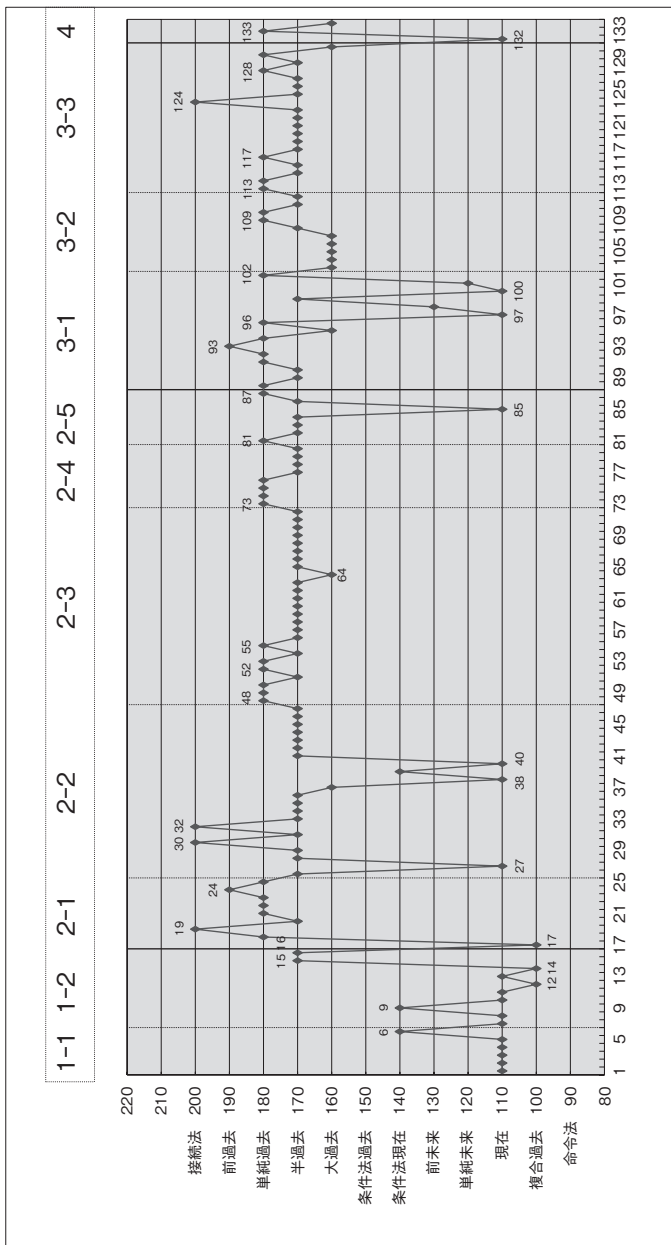
段落	小区分	文番号	動詞番号		時制コード	時制
2	2.2.	12	33	Il <u>avait</u>	170	半過去
			34	il <u>demeurait</u>	170	半過去
			35	qu'on <u>ignorait</u>	170	半過去
			36	s'il la <u>sentait</u>	170	半過去
		13	37	Jamais d'ailleurs il <u>n'avait connu</u>	160	大過去
			38	champs les inutiles <u>sont</u>	110	現在
			39	les paysans <u>feraient</u>	140	条件法現在
		14	40	comme les poules qui <u>tuent</u>	110	現在
			41	il <u>allait</u>	170	半過去
		15	42	il ne <u>remuait</u>	170	半過去
			43	Il ne <u>faisai</u>	170	半過去
			44	qu' <u>agissait</u>	170	半過去
		16	45	<u>retombaient</u>	170	半過去
			46	<u>Avait</u>	170	半過去
	47		Personne ne <u>se le demandait</u>	170	半過去	
	2.3.	18	48	les choses <u>allèrent</u>	180	単純過去
			49	son impassibilité <u>finirent</u>	180	単純過去
		19	50	il <u>devint</u>	180	単純過去
			51	qui l' <u>entouraient</u>	170	半過去
		20	52	On <u>imagina</u>	180	単純過去
			53	sa cécité <u>put</u>	180	単純過去
		21	54	qu'il <u>mangeait</u>	170	半過去
			55	on <u>fit</u>	180	単純過去
		22	56	s'en <u>venaient</u>	170	半過去
			57	on <u>se le disait</u>	170	半過去
			58	<u>se trouvait</u>	170	半過去
		23	59	on <u>posait</u>	170	半過去
			60	il <u>commençait</u>	170	半過去
		24	61	<u>flairait</u>	170	半過去
			62	s' <u>approchait</u>	170	半過去
			63	<u>mangeait</u>	170	半過去
			64	<u>avait éveillé</u>	160	大過去
	65		s' <u>écartait</u>	170	半過去	
	66		qu'il <u>envoyait</u>	170	半過去	
25	67	<u>c'étaient</u>	170	半過去		

動詞時制と指示表現の織りなすテキスト模様 西村淳子

段落	小区分	文番号	動詞番号		時制コード	時制
2	2.3.	26	68	<u>se remettait</u>	170	半過去
			69	<u>il protégeait</u>	170	半過去
			70	<u>défendait</u>	170	半過去
		27	71	<u>Tantôt on lui faisait</u>	170	半過去
			72	<u>qu'il ne pouvait</u>	170	半過去
	2.4.	28	73	<u>se lassa</u>	180	単純過去
			74	<u>frappa</u>	180	単純過去
			75	<u>le gifla</u>	180	単純過去
		29	76	<u>Ce fut</u>	180	単純過去
		30	77	<u>lançaient</u>	170	半過去
			78	<u>imprimait</u>	170	半過去
		31	79	<u>Il ne savait</u>	170	半過去
	80		<u>demeurait</u>	170	半過去	
	2.5.	32	81	<u>on le contraignit</u>	180	単純過去
			82	<u>On le portait</u>	170	半過去
		33	83	<u>dès qu'il entendait</u>	170	半過去
			84	<u>il tendait</u>	170	半過去
		34	85	<u>est</u>	110	現在
			86	<u>rapportait</u>	170	半過去
		35	87	<u>Ce fut</u>	180	単純過去
	3	3.1.	36	88	<u>mourut</u>	180
89				<u>la terre était</u>	170	半過去
37			90	<u>il gelait</u>	170	半過去
			91	<u>conduisit</u>	180	単純過去
39			92	<u>laissa</u>	180	単純過去
			93	<u>la nuit fut venue</u>	190	前過去
			94	<u>il affirma</u>	180	単純過去
			95	<u>qu'il ne l'avait plus retrouvé</u>	160	大過去
40			96	<u>il ajouta</u>	180	単純過去
			97	<u>faut</u>	110	現在
			98	<u>quelqu'un l'aura emmené</u>	130	前未来
			99	<u>qu'il avait</u>	170	半過去
41			100	<u>est</u>	110	現在
42			101	<u>I reviendra</u>	120	単純未来
43	102	<u>il ne revint</u>	180	単純過去		

段落	小区分	文番号	動詞番号		時制コード	時制	
3	3.2.	44	103	l'aveugle <u>s'était mis</u>	160	大過去	
		45	104	il <u>avait erré</u>	160	大過去	
		46	105	l'avait peu à peu <u>envahi</u>	160	大過去	
			106	il <u>s'était assis</u>	160	大過去	
		47	107	Il ne <u>se releva</u>	180	単純過去	
		48	108	Les blancs flocons qui <u>tombaient</u>	170	半過去	
			109	<u>ensevelirent</u>	180	単純過去	
		49	110	Son corps raidi <u>disparut</u>	180	単純過去	
			111	n' <u>indiquait</u>	170	半過去	
			112	le cadavre <u>était</u>	170	半過去	
		3.3.	50	113	Ses parents <u>firent</u>	180	単純過去
				114	Ils <u>pleurèrent</u>	180	単純過去
	51		115	L'hiver <u>était</u>	170	半過去	
			116	le dégel n' <u>arrivait</u>	170	半過去	
	52		117	les fermiers <u>remarquèrent</u>	180	単純過去	
			118	qui <u>tournoyaient</u>	170	半過去	
			119	<u>s'abattaient</u>	170	半過去	
			120	<u>repartaient</u>	170	半過去	
			121	<u>revenaient</u>	170	半過去	
	53		122	ils <u>étaient</u>	170	半過去	
	54		123	<u>portait</u>	170	半過去	
			124	comme s'ils <u>se fussent réunis</u>	200	接続法	
			125	ils <u>se laissaient</u>	170	半過去	
			126	qu'ils <u>tachaient</u>	170	半過去	
			127	<u>fouillaient</u>	170	半過去	
	55		128	Un gars <u>alla</u>	180	単純過去	
		129	qu'ils <u>faisaient</u>	170	半過去		
		130	<u>découvrit</u>	180	単純過去		
56	131	<u>avaient disparu</u>	160	大過去			
4	4	57	132	je ne <u>puis</u>	110	現在	
			133	<u>fut</u>	180	単純過去	
			134	l' <u>avaient connu</u>	160	大過去	

図2. L'Avetgle 動詞時制分布図



資料iv.

資料v.

表5. L'Aveugle 動詞時制リスト

段落	小 区分	文 番号	動詞 番号		時制 コード	時制	語り手	主人公の盲人	
1	1.1.	2	1	<u>emplit</u>	110	現在	nous		
		3	2	<u>est</u>	110	現在			
			3	<u>boivent</u>	110	現在	nos yeux		
			4	<u>font</u>	110	現在	nos âmes		
		4	5	<u>vient</u>	110	現在	nous		
			6	<u>on voudrait</u>	140	条件法現在	(on)		
	1.2.	5	7	<u>restent</u>	110	現在		Les aveugles, leur (éternelle obscurité)	
			8	<u>apaisent</u>	110	現在		ils	
			9	<u>voudrait</u>	140	条件法現在		leur (chien)	
		6	10	<u>rentrent</u>	110	現在		ils	
			11	<u>dit</u>	110	現在			
			12	<u>a fait</u>	100	複合過去			
			13	<u>répond</u>	110	現在		l'autre	
			14	<u>Je m'en suis bien aperçu</u>	100	複合過去		je m'	
	2	2.1.	7	17	<u>J'ai connu</u>	100	複合過去	j'	un de ces hommes
				18	<u>la vie fut</u>	180	単純過去		
19				<u>qu'on puisse rêver</u>	200	接続法	(on)		
8			20	<u>était</u>	170	半過去		c', un paysans, le fils d'un fermier normand	
			21	<u>vécurent</u>	180	単純過去			
			22	<u>on eut</u>	180	単純過去		lui	
			23	<u>il ne souffrit</u>	180	単純過去		il	
		24	<u>les vieux furent partis</u>	190	前過去				
25		<u>l'existence atroce commença</u>	180	単純過去					
2.2.		10	26	<u>tout le monde dans la ferme le traitait</u>	170	半過去		le	
			27	<u>comme un gueux qui mange</u>	110	現在		un gueux	
		11	28	<u>on lui reprochait</u>	170	半過去		lui	
	29		<u>on l'appelait</u>	170	半過去		l', fainéant, magant,		
	30		<u>bien que son beau-frère se fût emparé</u>	200	接続法		son (beau-frère), sa (part)		
	31		<u>on lui donnait</u>	170	半過去		lui		
32	<u>pour qu'il ne mourût</u>	200	接続法		il				

動詞時制と指示表現の織りなすテキスト模様 西村淳子

	その他の人	不特定の人	時間表現	空間表現	もの	抽象名詞
					premier soleil,cette lumière, la terre	joie, bonheur de vivre
					le ciel, la campagne, les maisons	
					nos yeux, ces couleurs vives	
					(nos) âmes	de l'allégresse
						des envies de danser, des envies de courir, des envies de chanter, une légèreté heureuse de la pensée, une sorte de tendresse.
		on			le soleil	
				sous les portes		leur (éternelle obscurité), cette gaieté nouvelle
			à toute minute		leur chien	
	un jeune frère, une petite sœur		le jour fini			
	l'enfant					
			tantôt			
					Loulou	
						la vie, martyres
		on				
	un fermier			normand		
	le père, la mère					
		on				son horrible infirmité
	les vieux		dès que...			
						l'existence atroce
	une sœur, tout le monde	des autres			la ferme	
					le pain des autres	
		on	à chaque repas		la nourriture	
		on				
	(son) beau-frère				sa part d'héritage	
		on			la soupe	regret

段落	小区分	文番号	動詞番号		時制コード	時制	語り手	主人公の盲人	
2	2.2.	12	33	Il <u>avait</u>	170	半過去		il	
			34	il <u>demeurait</u>	170	半過去		il, lui-même	
			35	qu'on <u>ignorait</u>	170	半過去			
			36	s'il la <u>sentait</u>	170	半過去		il	
		13	37	Jamais d'ailleurs il n' <u>avait connu</u>	160	大過去		il, sa (mère), l'(ayant), l'(aimant)	
			38	champs les inutiles <u>sont</u>	110	現在			
			39	les paysans <u>feraient</u>	140	条件法現在			
			40	comme les poules qui <u>tuent</u>	110	現在			
		14	41	il <u>allait</u>	170	半過去		il	
			42	il ne <u>remuait</u>	170	半過去		il	
		15	43	Il ne <u>faisai</u>	170	半過去		il	
			44	qu' <u>agitait</u>	170	半過去		ses (paupières)	
	45		<u>retombaient</u>	170	半過去		ses (yeux)		
	16	46	<u>Avait</u>	170	半過去		il, sa (vie)		
	17	47	Personne ne <u>se le demandait</u>	170	半過去				
	2.3.	18	48	les choses <u>allèrent</u>	180	単純過去			
			49	son impassibilité <u>finirent</u>	180	単純過去		son (impuissance), son (impassibilité), ses (parents)	
			19	50	il <u>devint</u>	180	単純過去		il
		51		qui l' <u>entouraient</u>	170	半過去		l'	
		20	52	On <u>imagina</u>	180	単純過去			
			53	sa cécité <u>put</u>	180	単純過去		sa (cécité)	
		21	54	qu'il <u>mangeait</u>	170	半過去		il	
			55	on <u>fit</u>	180	単純過去		l'impotent	
		22	56	s'en <u>venaient</u>	170	半過去			
			57	on <u>se le disait</u>	170	半過去			
58			<u>se trouvait</u>	170	半過去				
23		59	on <u>posait</u>	170	半過去		son (assiette)		
		60	il <u>commençait</u>	170	半過去		il		
24	61	<u>flairait</u>	170	半過去		l'homme			
	62	s' <u>approchait</u>	170	半過去					
	63	<u>mangeait</u>	170	半過去					
	64	<u>avait éveillé</u>	160	大過去		le pauvre diable			
	65	s' <u>écartait</u>	170	半過去					
	66	qu'il <u>envoyait</u>	170	半過去		il, lui			
25	67	<u>c'étaient</u>	170	半過去					

動詞時制と指示表現の織りなすテキスト模様 西村淳子

その他の人	不特定の人	時間表現	空間表現	もの	抽象名詞
				une figure, deux grands yeux blancs, pains à cacheter	
				l'injure	
	on			la	
sa mère		toujours			aucune tendresse
	les inutiles		aux champs		
	les paysans			les poules, les infirmes, elles	
		sitôt, en été, en hiver	devant la porte, contre la cheminée	la soupe, la porte	
		jusqu'au soir			
				un geste, un mouvement	
				ses paupières	une sorte de souffrance
				la tache blanche de ses yeux	
				sa vie	un esprit, une pensée, une conscience
	personne se				
		pendant quelques années			les choses
ses parents				son impuissance, son impassibilité	
				un souffre-douleur, une sorte de bouffon-martyr, la férocité, la gaieté	
				la proie, brutes	
	on			les farces	
					sa cécité
les voisins	on			ses repas, des heures de plaisir	supplice
les paysans				ce divertissement	
	on se		de porte en porte		
		chaque jour	la cuisine de la ferme		
	on	tantôt	sur la table, devant son assiette	son assiette	
				le bouillon, quelque chat, quelque chien	
				la bête, son instancé	l'infirmité
					délicatesse
		quand...		un clapotis de langue	l'attention (du pauvre diable)
				elle (=la bête) le coup de cuiller	
			devant lui		
spectateurs		alors	le long des murs	des rires, des poussées, des trépignements	

段落	小区分	文番号	動詞番号		時制コード	時制	語り手	主人公の盲人		
2	2.3.	26	68	<u>se remettait</u>	170	半過去		lui		
			69	<u>il protégeait</u>	170	半過去		il		
			70	<u>défendait</u>	170	半過去		son (assiette)		
		27	71	<u>Tantôt on lui faisait</u>	170	半過去		lui		
			72	<u>qu'il ne pouvait</u>	170	半過去		il		
	2.4.	28	73	<u>se lassa</u>	180	単純過去				
			74	<u>frappa</u>	180	単純過去		le, le, le, l'autre		
			75	<u>le gifla</u>	180	単純過去		le		
		29	76	<u>Ce fut</u>	180	単純過去				
		30	77	<u>lançaient</u>	170	半過去		lui		
			78	<u>imprimait</u>	170	半過去		ses (paupières)		
		31	79	<u>Il ne savait</u>	170	半過去		il		
			80	<u>demeurait</u>	170	半過去		le		
	2.5.	32	81	<u>on le contraignit</u>	180	単純過去		le		
			82	<u>On le portait</u>	170	半過去		le		
		33	83	<u>dès qu'il entendait</u>	170	半過去		il		
			84	<u>il tendait</u>	170	半過去		il, son (chapeau)		
		34	85	<u>est</u>	110	現在				
			86	<u>rapportait</u>	170	半過去		il		
		35	87	<u>Ce fut</u>	180	単純過去		lui		
3	3.1.	36	88	<u>mourut</u>	180	単純過去		il		
			37	89	<u>la terre était</u>	170	半過去			
				90	<u>il gelait</u>	170	半過去			
		38	91	<u>conduisit</u>	180	単純過去		son (beau-frère), le, lui		
			92	<u>laissa</u>	180	単純過去		l'		
		39	93	<u>la nuit fut venue</u>	190	前過去				
			94	<u>il affirma</u>	180	単純過去				
			95	<u>qu'il ne l'avait plus retrouvé</u>	160	大過去		l'		
		40	96	<u>il ajouta</u>	180	単純過去				
			97	<u>faut</u>	110	現在		en		
			98	<u>quelqu'un l'aura emmené</u>	130	前未来		l'		
			99	<u>qu'il avait</u>	170	半過去		il		
		41	100	<u>est</u>	110	現在		i		
		42	101	<u>I reviendra</u>	120	単純未来		I		
		43	102	<u>il ne revint</u>	180	単純過去		il		

動詞時制と指示表現の織りなすテキスト模様 西村淳子

	その他の人	不特定の人	時間表現	空間表現	もの	抽象名詞
					un mot, la main droite	
					son assiette, la gauche	
		on	tantôt		des bouchons, du bois, des feuilles, des ordures	
		on	puis		des plaisanteries	
	le beau-frère,		toujours		des efforts inutiles, les coups	
			sans cesse			
			alors		un jeu nouveau, le jeu des claques	
	les valets de charrue, le goujat, les servantes		à tout moment		leur main, la figure, ses paupières, un mouvement précipité	
			sans cesse		les bras	les approches
		on	Enfin			
		on	les jours de marché	sur les routes	les routes	
			dès qu' ...		un bruits des pas, le roulement d'une voiture	
					son chapeau	la charité
	le paysan					
			pendant des semaines entières		un sou	
			alors			une haine
			Un hiver		la terre, neige	
	(son) beau-frère		un matin	fort loin, sur une grande route	l'aumône	
	il		tout le jour	y		
			quand...			
	il, ses (gens)					
	il					
	il		Puis			
	quelqu'un					
			d'main		la soupe	
			le lendemain			

段落	小区分	文番号	動詞番号		時制コード	時制	語り手	主人公の盲人	
3	3.2.	44	103	<u>l'aveugle s'était mis</u>	160	大過去		l'aveugle	
		45	104	<u>il avait erré</u>	160	大過去		il, se	
		46	105	<u>l'avait peu à peu envahi</u>	160	大過去		l'	
			106	<u>il s'était assis</u>	160	大過去		ses (jambes), le, il	
		47	107	<u>Il ne se releva</u>	180	単純過去		il	
		48	108	<u>Les blancs flocons qui tombaient</u>	170	半過去			
			109	<u>ensevelirent</u>	180	単純過去		l'	
		49	110	<u>Son corps raidi disparut</u>	180	単純過去		son (corps)	
			111	<u>n'indiquait</u>	170	半過去			
		112	<u>le cadavre était</u>	170	半過去		le cadavre		
		50	113	<u>Ses parents firent</u>	180	単純過去		ses (parents), le	
			114	<u>Ils pleurèrent</u>	180	単純過去			
	51	115	<u>L'hiver était</u>	170	半過去				
		116	<u>le dégel n'arrivait</u>	170	半過去				
	52	117	<u>les fermiers remarquèrent</u>	180	単純過去				
		118	<u>qui tournoyaient</u>	170	半過去				
		119	<u>s'abattaient</u>	170	半過去				
		120	<u>repartaient</u>	170	半過去				
		121	<u>revenaient</u>	170	半過去				
	3.3.	53	122	<u>ils étaient</u>	170	半過去			
		54	123	<u>portait</u>	170	半過去			
			124	<u>comme s'ils se fussent réunis</u>	200	接続法			
			125	<u>ils se laissaient</u>	170	半過去			
			126	<u>qu'ils tachaient</u>	170	半過去			
			127	<u>fouillaient</u>	170	半過去			
		55	128	<u>Un gars alla</u>	180	単純過去			
			129	<u>qu'ils faisaient</u>	170	半過去			
			130	<u>découvrit</u>	180	単純過去		le corps de l'aveugle	
56		131	<u>avaient disparu</u>	160	大過去		ses (yeux)		
4		4	57	132	<u>je ne puis</u>	110	現在	je	le gueux
	133		<u>fut</u>	180	単純過去		son		
	134		<u>l'avaient connu</u>	160	大過去		l'		

動詞時制と指示表現の織りなすテキスト模様 西村淳子

その他の人	不特定の人	時間表現	空間表現	もの	抽象名詞
		Après…			le frois
			sous cette écume de glace	la route, les fossés, maison	
				neiges, ses jambes	l'engourdissement
			au milieu d'une plaine	ses jambes	
				les blancs flocons	
		toujours			accumulation de leur foule infinie
			la place		
(ses) parents		pendant huit jours			
ils					
		l'hiver, le dégel			
les fermiers		un dimanche		la messe	un grand vol de corbeaux
		sans fin	au dessus de la plaine	la plaine	
		puis		une pluie	
			à la même place		
		toujours			
		la semaine suivante	là	ils, les oiseaux	
				le ciel, un nuage	
			de tous les coins de l'horizon	ils	
			dans la neige éclatante	ils, de grands cris, la neige	
				ils	
					obstination
un gars					
				ils	
				ses yeux, les longs becs voraces	
		des jours de soleil			la vive gaieté, souvenir, une pensée mélancolique son horrible mort, un soulagement
tous ceux					